

千葉教育

菜

令和5年度
No.684

千葉の子どもたちの未来のために

特集

児童生徒の学習意欲の向上

○シリーズ 現代の教育事情

県教育庁教育振興部学習指導課

帝京平成大学人文社会学部児童学科教授

佐瀬 一生

○提 言

ホキ美術館館長

保木 博子



学校自慢

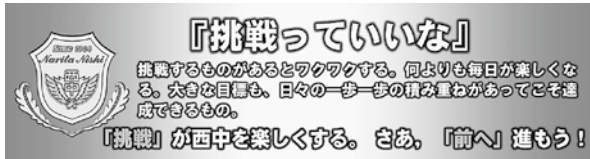
教育DXを進め、 新たな学びの場づくりをめざす

成田市立西中学校校長 藤崎 修治

ふじさき しゅうじ
藤崎 修治



1 『前へ』



西中学校の教育目標は「挑戦」そして「前へ」である。よりよい学校にしていくためには、足りない部分は何か、子供たちは何を求めているのか、子供たちの思いに本当の意味で寄り添うことができているのか、謙虚な気持ちで学校の現状に向き合うことが必要である。明らかになった課題に対して真摯に取り組み、誰一人取り残すことなく前進し続ける学校でありたいと考えている。その思いを表した教育目標が「前へ」である。前へ進み続けるために、私たちは日々挑戦する姿勢を大切にしている。「挑戦」が西中を楽しくする。このポリシーをもとに前進し続ける学校、それが私たちの西中学校である。

2 全力で生徒に寄り添うためのしなやかさと前進力

本校の自慢は、教職員・生徒が持っている立ち止まらずに常に前へ進み続ける「しなやかさ」と「前進力」である。その力を最も注いでいるのは、新たな学びの場の創造を目指したICT活用から一歩進めた校内のDX推進である。「ICT活用の日常化」「生徒主体の活用」「効果の見える化」の3本の柱を設定してDXに取り組んでいる。学習活動はもちろんのこと、家庭学習でも、生徒の学校生活全般にわたってのDX化を推進している。

(1) 「ICT活用の日常化」

目指す学校像にも掲げている「誰一人取り残さない」ために生徒指導部を中心に取り組

んでいるものが、「ICT機器を活用したSOSの出し方教育の充実」である。生徒が「苦しい」「辛い」と感じた時に、すぐにSOSを出せる環境づくりをコンセプトにタブレットを活用した相談環境を構築した。平日はもちろん、長期休業中にも生徒のSOSを確認することができ、早期に対応することができるようになった。生徒の悩みが可視化されたことで、日常生活の中での教師との対話も増え、学校生活アンケートからも生徒の「学校での安心感」の向上に繋がっていると感じている。

(2) 「生徒主体の活用」

生徒会組織を改編し、今年度よりICT委員会を設置し、学校生活の様々な場面で生徒主体の情報発信を行っている。各行事では動画を撮影し、YouTube配信を行っている。活動を通して、互いの具体的な指示の伝え方や画面の裏に隠れている、保護者の気持ちを考える姿が生徒に見られるようになっている。



3 おわりに

どんな場面でも「前へ」進むことができるのは、職員のポジティブな人間関係が基盤になっている。前例や常識にもとらわれずに自分たちの進むべき道を考え出すこと、そして楽しむこと、それが少しずつでも実現できているのが本当にありがたいことである。これからは私たちは挑戦を楽しみながら前へ進んでいきたいと思う。

◆学校自慢	教育DXを進め、新たな学びの場づくりをめざす	成田市立西中学校校長	藤崎 修治
◆提言	写実の殿堂をめざして	ホキ美術館館長	保木 博子…2
シリーズ 現代の教育事情 児童生徒の学習意欲の向上			
■児童生徒の学習意欲の向上のために		県教育庁教育振興部学習指導課義務教育指導室…4	
■児童生徒の学習意欲の向上と教師の授業力		帝京平成大学人文社会学部児童学科教授	佐瀬 一生…6
チーム学校の仲間たち			
■学校を創る	教師も育つ学校を目指して	館山市立北条小学校校長	安藤深佳子…10
■学校を支える	職員が一つになる学校づくりを目指して	県立松戸特別支援学校教頭	中山 忠史…12
■学校を動かす	教務主任としてできること～「チーム中根」を合言葉に～	いすみ市立中根小学校教諭	岩瀬 和也…14
■授業を創る	自ら思考し、表現する力を高める取組	松戸市立第五中学校教諭	石川 賢…16
■授業を創る	授業づくりのヒントは近くにあり!! 子供の言い訳から学ぶ、深め合う授業づくり	四街道市立吉岡小学校教諭	平澤 昭臣…18
■授業を創る	学習意欲の向上が生徒の主体性を引き出す	柏市立土中学校教諭	谷中 正幸…20
長期研修生報告			
■令和4年度長期研修生の研究の紹介			令和4年度長期研修生…22
■大学院修士課程研修生の研究の紹介			
千葉大学大学院長期研修で学んだこと		袖ヶ浦市立根形中学校教諭	野村裕美子…26
学校教育における情動の探究		富津市立富津小学校教諭	磯部 光泰…27
ケーススタディ～Change the world～			
■教員の意識を変える市原市のGIGAスクール環境		市原市立国分寺台西小学校校長	生田 勲…28
情報アラカルト			
■千葉県誕生150周年記念 企画展			
「アーツ・アンド・クラフツとデザイナー－ウィリアム・モリスからフランク・ロイド・ライトまで－」			県立美術館…30
■企画展示「マリンサイエンスギャラリー アサクサノリ2－ノリの世界－」			
			県立中央博物館 分館海の博物館…31
学校 NOW !			
■我が校の働き方改革	Challenge! 働き方改革	君津市立八重原小学校校長	太田ゆかり…32
■高校NOW !	【連載・県立高校の今】第5回		
	松戸国際高校（グローバルスクール）、袖ヶ浦高校（先進ITコース）		
	茂原樟陽高校（農業経営者育成に関するコース）、小見川高校（医療コース）		
		県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室…34	
◆発信！特別支援教育	『安房地域における医療的ケア児受け入れに必要な体制整備の支援、及び関係機関との連携における ネットワークの充実について』		
	～「安房地区医療的ケア児ネットワーク連絡会」を通して～		
		県立安房特別支援学校教頭	鈴木 照子…38
◆千葉歴史の散歩道	古代下総の役所群－市川市国府台遺跡－		
		県教育庁教育振興部文化財課文化財主事	勝田 雄大

道 標

本県では、令和4年3月に「千葉県総合計画～新しい千葉の時代を切り開く～」が策定され、現在、各施策を推進しているところである。その中の「教育施策の充実」には、主な取組として「人生を主体的に切り拓くための学びの確立」を掲げ、その筆頭に「学習意欲を高め、学力向上を図る取組の推進」を掲げている。

また、「ちばっ子『学力向上』総合プラン」でも、令和2年度からは、「自ら課題を持ち 多様な人々と協働し 粘り強くやりぬく子」、「子供と社会の変化を捉え 自律的に学ぶ姿勢を持ち 授業を工夫する教員」の実現を目指し、子供たちの学ぶ意欲の向上と教員の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の2点を支援するプランとして機能させ、ちばっ子の学力向上を図っているところである。

各学校はこれらを受け、児童生徒の学力向上に向け、様々な取組を展開しているところであろう。そしてどの学校も、児童生徒の学習意欲の向上が、自ら主体的に学ぶ児童生徒の育成や、個別最適な学び及び協働的な学びの推進にとって必要不可欠な要素であり、大きな課題であると捉えていると思う。そして、その課題の解決に向け、わかりやすい授業の実施に向けた教員の授業力の向上や、児童生徒に対する効果的な教材教具の開発等に努めていることであろう。

本号では、児童生徒の学習意欲の向上に向けた県の施策や取組、有識者による解説等を紹介する。児童生徒の学習意欲を高めるために日々尽力している学校の一助となれば幸いである。

写実の殿堂をめざして (インタビュー要旨)



ホキ美術館館長 保木 博子

1 はじめに

ホキ美術館は、千葉市緑区あすみが丘にある写実絵画専門の美術館です。現在約500点の写実絵画を保有しています。年に2回展示替えを行い、常時約120点を展示しています。

写実絵画は、見たものを見たままに描く絵画です。しかし、写実絵画の大きな特徴は、作家の主観が表現されているということです。例えば、リンゴ一つでも、赤い部分が強調されたり、影の部分が強調されたりと人によってとらえ方が違います。同じテーマを扱っても、作家さんによって描き方や見え方、考え方の違いがあります。それが表現の仕方の違いとして現れ、伝わるものも違ってきます。

2 一枚の絵画との出会いから

ホキ美術館の創設者である私の父、保木博夫は、絵が好きで、様々な絵画を収集しておりました。日本の作家さんでよい人はいないかと探していた時、森本草介さんの絵画と出会い、衝撃を受けました。そして、森本さんの作品がどうしても欲しいということで買わせていただいたのが「横になるポーズ」という作品です。この作品を購入したことがきっかけとなり、もっとこのような日本人の描いた写実絵画があるのではないかと、コレクションが始まりました。

作品がまとまってくると、人に見せたくなるものです。年に一日、自宅をオープンハウスのような形にし、みなさんに絵を見ていた

だくことにしました。初めは一日200人から300人位でしたが、口コミで広がり、たくさんの方がいらっしゃるようになりました。中には飛行機に乗ってわざわざ遠方からいらっしゃる方もいて、一日1,000人位の方が来てくれるようになりました。一日にこれだけの数の人が自宅に来るので、時として身の危険を感じることもありました。そこで父が、「この企画をいったん閉めて、もっと大々的にやった方がよいのではないか。」と言い出しました。私はこの父の言葉から、まさか美術館をつくることになるとは思いませんでした。

しかし、父は美術館設立に向けて積極的に動きだしました。候補となる場所を探すために、私は父と、日本中様々な土地に赴いて検討しました。軽井沢や箱根など美術館が多く集まっている観光地も候補に挙がりました。

しかし、私たちは開館させた美術館をどう育てていくかが大切と考えていましたので、そのような場所では、家族の誰が通うのか、どうやって運営にかかわるのかという問題がありました。結局、今住んでいる千葉から引っ越したくないという父の思いから、自分たちの住まいのある千葉で探すことになりました。ちょうどそのころ、千葉市のあすみが丘東地区の区画整理が始まり、この場所を見つけました。父は「建物を見ただけで中に入りたいと思うようなものを作ってほしい。」と設計士にお願いをしていましたが、そんな建物を作るのにぴったりの、かわった形の土地だったのです。

3 作家と共に成長する美術館として

この美術館ができるまで、写実作家の方々には、作品を露出する機会が少なく、常設で展示する場がありませんでした。ですから、作家の方はご近所から「あの方、絵描きさんらしいよ。」程度の認識しかされていなかったそうです。しかし、美術館に絵が展示されるようになって、周りの認識が変わってきたり、身内以外の人から評価されたりするようになると、作家さんたちの中に「もっと頑張らなきゃ。」という意識が芽生えて、作品がどんどん変わっていきました。ですから、私たちは作家さんたちと一緒に成長する美術館だと思っています。

私たちは2013年から、新たな写実作家の発掘、応援のために「ホキ美術館大賞」を制定しています。これは、40歳以下の作家を対象に、3年ごとに行う公募展で、入選作品を当美術館に展示するというものです。

当美術館開館前の写実絵画の世界では、作家さんの数は多くはありませんでした。ベテランの作家さんが活躍をしていましたが、若い人が写実絵画を描くということは少なかったように思います。当時は、作家になっても40~50歳になるまでは、家族に働いてもらわないと生活できないという暗黙の認識のようなものがあったからです。この状態が続いたら、作家がいなくなってしまうという危機感がありました。若い人に注目してもらうためにはどうしたらよいか、若い作家に「将来明るいぞ。」と思ってもらうにはどうしたらよいか、そして一人前になるまでには時間がかかるという空気を払しょくするためにはどうしたらよいか等いろいろなことを考えました。

実際に自分たちができることを考えたとき、若い作家の作品に露出の機会を与えること、すなわち「ホキ美術館大賞」だったのです。

4 写実絵画の裾野を広げるために

もう一つ私たちが力を入れていることは、鑑賞者の裾野を広げることです。その一つとして、年に1回「スモールコレクション展」を開催しています。これは、4号程度の小さな作品を作家に描いていただき、展示します。お客様が欲しいと思った作品に札を入れてもらい、それを100%抽選で販売しています。画廊で絵画作品を購入することはハードルが高いのが現状です。そこで、ほしい作品を手に入れやすくするためにこのような企画をしています。コロナ禍前は、作家を呼んでギャラリートークも行っていました。「日頃どんなことを考えているのか。」「この絵はどういうときに描いたのか。」「若いころ描いた自分の作品を見てどう思うか。」など話していただくことで、作品や作家の方をより身近に感じていただく機会になっていると思います。

5 おわりに

10年前、父から館長を引き継ぎ、作家さんたちのお付き合いも長くなりました。長くお付き合いしていると、作家さんの作品が変化していくのを目のあたりにすることができます。それがとても興味深いです。これからも変化していく作品を見届け、世に出し、作家さんたちに寄り添っていきたいと思います。

最後に皆さんに私の思いをお話しします。最近、子供たちが絵を見る機会が減っているように思います。ちょっとでも興味があったらどんな絵でもとりあえず見て、好きでも嫌いでもよいので、自分の気持ちを表現できるようにしてほしいと思います。

ホキ美術館 千葉市緑区あすみが丘3-15
info@hoki-museum.jp

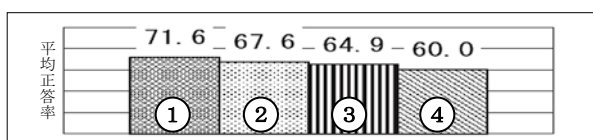
児童生徒の学習意欲の向上のために

県教育庁教育振興部学習指導課義務教育指導室

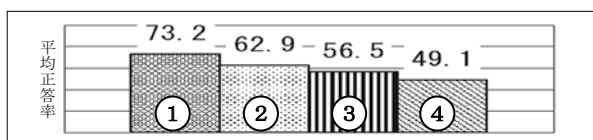
1 令和5年度の全国学力・学習状況調査の 千葉県の結果から

令和5年4月18日に行われた全国学力・学習状況調査では、実施された各教科の学習意欲に関する調査も行われている。ここでは、「各教科を好きか」の質問項目を抽出し、平均正答率との相関を示す。

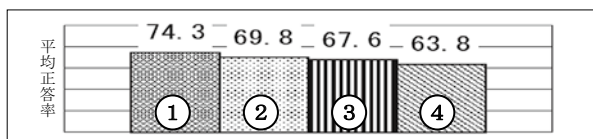
〔小学校・国語〕



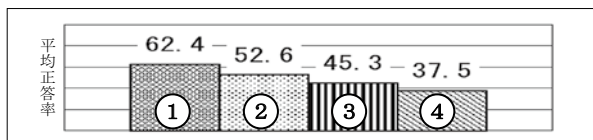
〔小学校・算数〕



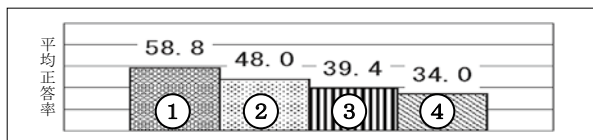
〔中学校・国語〕



〔中学校・数学〕



〔中学校・英語〕



(その教科を「好きか」について、グラフの左から①「当てはまる」、②「どちらかといえば、当てはまる」、③「どちらかといえば、当てはまらない」、④「当てはまらない」。数字は平均正答率。)

小学校及び中学校の各教科において、その教科が「好き」と肯定的に回答した児童生徒ほど、平均正答率が高い傾向がグラフから分かる。

各教科において、その教科を好きになることが、学力向上につながると考えられる。学力向上には、学習意欲の向上が必要である。

2 「学力向上」総合プランについて

県では、児童生徒の学力向上を図るために、令和2年に第3期千葉県教育振興基本計画「次世代へ光り輝く『教育立県ちば』プラン」が策定されたことを受け、「ちばっ子『学力向上』総合プラン(ダブル・アクション+ONE)」を策定した。

「ダブル・アクション+ONE」は、子供たちの学ぶ意欲の向上を図る「アクション1」と教員の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る「アクション2」の2つを推進し、「+ONE」の取組により、ダブル・アクションの取組をチェックすることで、千葉県の子供たちの学力向上を目指している。

ここでは、特に「児童生徒の学ぶ意欲の向上」を図る「アクション1」の主な事業について紹介する。

(1) 子供たちの主体的な学び促進事業

県独自の学習教材「ちばっ子チャレンジ100」(小学校)、「ちばのやる気学習ガイド」(中学校)、「『家庭学習のすすめ』サイト」の整備充実を図り、これらの教材を活用した



児童生徒の主体的な学びを支援している。MEXCBT（メクビット）での活用もできるので、授業中はもちろんのこと、家庭学習でも活用していただきたい。令和5年度は、「ちばっ子チャレンジ100」「ちばのやる気学習ガイド」の国語と理科の問題を改訂した。

(2)魅力ある専門分野の人材活用事業

各分野において優れた知識・技能を持つ人材を特別非常勤講師として配置し、各教科、特別の教科である道徳、外国語活動、総合的な学習の時間（プログラミング教育含む）及び小学校のクラブ活動で興味・関心の多様化に応じた授業を行うことにより、児童生徒の学習意欲の向上を図っている。

また、算数、理科、体育及び図画工作の専科指導を行うための「小学校専科非常勤講師等」を配置し、指導者の専門性を生かした授業を行うことにより、児童の学ぶ意欲や学力の向上を図っている。今年度から来年度にかけて、効果検証を行っているところである。

他にも「千葉県学習サポーター派遣事業」「グローバル化に対応した英語教育の充実事業」「先進的教育活動による学ぶ意欲向上事業」「ICT活用教育の充実事業」の取組を進め、児童生徒の学習意欲の向上を図っている。詳細は、右の二次元コードで



3 学習意欲の向上には

ジョン・ハッティ著「教育の効果」（2018年、図書文化社）には、次のような内容が示されている。

「Dörnyei（2001）によると、学習者が有能さを感じているとき、自律性を十分に感じているとき、やりがいのある目標を設定したとき、適切な評価を得たとき、そして、他者か

ら認められたときに、動機付けは最も高くなると述べている。」「Ross（1988）は、学習者自身が学習のコントロール方法を身に付けることの効果に関する研究のメタ分析を行い、学習のコントロール方法を身に付けた度合いと学力の相関が高いことを示した。」

つまり、児童生徒が主体的に学習に取り組み、教師や友達から適切な評価を得ることで学習意欲が高まり、児童生徒自身が学習を調整していく方法を身に付ければ、学力向上につながるということである。

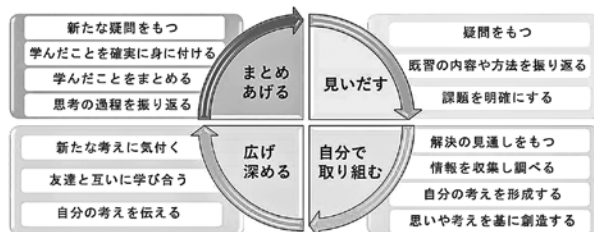
4 「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの活用を

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のため、県では、「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムの活用を推進している。

この実践モデルプログラムの学習過程「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」を、児童生徒自身が取り組めるようになれば、学習意欲が向上し、学力もそれに伴い向上していくはずである。

そのためには、教師も児童生徒も、この学習過程を意識して日々の授業に取り組んでいく必要がある。

「児童生徒の学習意欲の向上」と「教員の授業改善」は密接につながっているのである。



実践モデルプログラム

児童生徒の学習意欲の向上と教師の授業力

帝京平成大学人文社会学部児童学科（小学校・特別支援コース）

教授 佐瀬 一生



1 「わかる」「できる」の重要性

まず、問いから入ろう。枠内の（ ）に入る語句を答えてほしい。

学校教育は児童生徒の「生きる力（生きて働く知・徳・体のバランスの取れた力）」を育むことを理念とする。このうち知は「確かな学力」である。「確かな学力」は学校教育法第30条2項で「学力の3要素」として示されている（①）、（②）、（③）の3つから成る。

そして現学習指導要領では（④）、（⑤）、（⑥）が「育成すべき資質・能力の三本の柱」として重視されている。

教職教養のイロハである。現職教師の皆さんは、当然答えられると思う（答えられないと困る）。しかし、答えられたからそれでOK、ということでは全くない。

ここで本当に問いたいのは「覚えているか」ではなく、自分が「わかっているか」「できているか」である。語句を覚えている、その定義を暗唱できる、だけでは意味がない。「生きる力」も「確かな学力」も「主体的・対話的で深い学び」も、教師自身が自分で咀嚼し理解して（わかって）いるか、その理解に基づき教育活動（授業）の中で子供たちを相手に実践化して（できて）いるか、それが子供たちの+（プラス）の変容に確かにつながっているか、が重要なのである。それがつまり「授業力」ということになる。自分がどうなのか、ぜひ振り返ってみていただきたい。

2 「授業」と学習意欲

毎日、5～6単位時間行う「授業」という時間。貴方が行っている「授業」の時間は、子供たちにとってどんな時間になっているだろうか？

授業は端的に言えば、子供たちにとって「おもしろく、力がつく」ものである。しかし残念ながらそうではない「授業」も存在する。

「おもしろくない、（しかし）力はつく」と言う。「おもしろい、（しかし）力はつかない」ものは「（単なるその場限りの）お遊び」である。そして「おもしろくない、力もつかない」のは「（大いなる）時間潰し」でしかない。あなたの「授業」は、はたしてどれか？

学習意欲とは「主体的に学習に取り組む態度」であり「学びに向かう力」である。もっと端的に言えば「やる気」である。学習意欲（やる気）は「学びの推進エネルギー」であり、学力のスパイラル発展の中心であると考えられる。そして「授業」の在り方・やり方で大きく増減する。

現実として、授業中に「ただそこにいる」だけで無気力・無関心に過ごす子供たちの姿がある。それを「仕方ない」で片付けてはいけない。かつて佐藤学は「学びからの逃走」を論じたが、近年はその姿が学年・学校種・地域を問わず、さらに「ごく普通」に見られる。はっきり言おう。子供たちの学習意欲の低下も「授業」の積み重ねであり、教師（たち）の授業力不足に依るところも大きい。



3 授業力向上への「授業実践の基盤」

とは言え、高い授業力を初めから持っている教師などいない。授業を構想・計画し、実践し、振り返り次に繋げていく「授業のPDCA」を、日々の営みを通して重ねる中で少しずつ少しずつ身に付いていくものである。加えて、自ら求めて様々な場や方法で学ぶ中でステップアップしていくものである。

ベテラン層も含め、研修等で聞くと「授業力に自信がある」という方はそう多くない。謙遜もあるだろうが、自身の授業実践の基盤（拠所・芯）が不明確である様子も伺える。

以下、筆者自身の考える「授業実践の基盤」から二つ紹介する。もし共感されたら使っていただきたい。もちろん批判も大いにしてほしい（その場合は対案を持って）。

(1)指導のベクトル

学校教育における子供たちへの指導には大きな「ベクトル」がある。それは「直接指導から見守りへ」である（図1）。

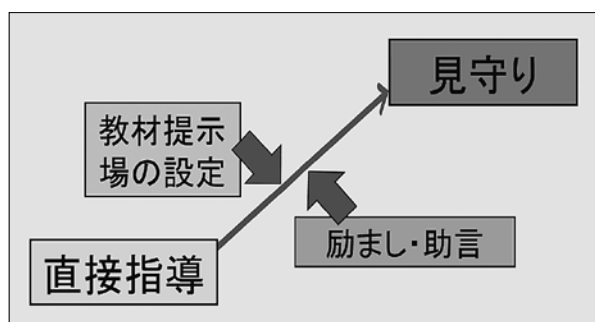


図1：指導のベクトル

小学校入学当初は教師からの直接的な指示・指導が多いのは当然だが、学年が進むにつれ、子供自身の選択・判断に委ねる部分を多くしていくことが求められる。そのために教師は目の前の子供（たち）の状況を丁寧に見取り、何を直接指導し何を子供自身に委ねるかを考え、現状より+1に繋げる手立てを施していく。その手立てが「具体的な学習活動（場・活動・形態等）の設定」「子供（たち）

が前に進む関わり（助言・励まし等）」の2面である。ここを誤ると、過保護や放任などの「-（マイナス）の指導」になってしまう。

(2)MUST思考とMAY・CAN思考

これらは教師の子供たちへの基本姿勢としての考え方（スタンス）である。基本的に、MUSTは「～しなければならない」、MAYは「～してもよい」、CANは「～できる」の意味である（英語教師の皆さんに「そんな単純じゃない」と叱られそうだがお許しいただきたい）。

MUST思考は子供たちに「～しないとダメ」といった指導を基調とする。-面に目を向け、-を+に変えようとする考え方である。勿論、それが必要な場面はある。しかし「～しないとダメ」系の言葉は言う教師もいい気持ちはしないし（いい気持ちなら教師をやめよう）、言われる子供（たち）はさらに嫌なものである。これが度重なると、子供（たち）は人格否定されていると感じるようになる。

一方、MAY・CAN思考は+面に目を向け、それを伸ばして周囲に広げていく考え方である。「～してもよい」「～できる」を認め、「したこと」を認め価値付けし、「～してよかった」「～できた」を実感させていく。言う教師も気持ちがいいし、言われる子供（たち）は承認されて自信を持ち、次への意欲も高まっていく。小さな+でも、それが積み重なると「+の歯車」が連鎖反応を示してどんどん回り、大きな成長に繋がる。

多くの教師は子供（たち）の「わかった」「できた」を認める指導の大切さを知っている。しかし、+面より-面に目が行きやすいものである。実際の指導の中で、意識無意識を問わずMUST基調の教師は案外多い。

MAY・CAN思考を実践化する上でも、子供たちを見取る力が極めて重要である。

4 授業の4力と23のコンピテンシー

「授業力」とは「授業実践力」「授業指導力」「授業経営力」等とも言われる、言わば「授業をする力」である。なお、この「授業をする」はPDCAのそれぞれであり一連である。

授業力の具体について、一つの論をここに示す。「授業の4力と23のコンピテンシー」である。10数年前の研究だが、筆者自身は自分の考えの柱の一つとしている。全国の「授業の達人」と言われる教師にインタビューして、「授業における重要な事柄」を話していただいた中からキーワードを抽出し類型整理したものである（表1）。

23の視点（コンピテンシー）を四つのカテゴリー（4力）に類型している。紙幅の都合で一つ一つの詳細な説明は省くが、授業をする時に何を大事にするか、のポイントはわかるだろう。「私なら…」と自身の授業を想起してみしてほしい。各人が「私はこれとこれを大事にしている」「確かにこれも大事だな」等、確認できるのではないだろうか。

「4力」のうち、「授業コミュニケーション力」「一瞬の対応力」「意欲向上力」は授業の「やり方」、「授業構成力」は「あり方」である。「やり方」だけではHow-toで終わる。根っことしての確かな「あり方」あってこそ、様々な「やり方」が生きてくるのである。

例えば、授業中の子供の発言に「どう返していいかわからない」と相談を受けることが

時々ある。その「返し」の方法は千差万別あるが、「返しの意味は何か？」を考えれば適切な方法は見えてくる。その意味は「認める」「確認する」「さらに促す」「子供の言葉をつないで広げ、深める」といったことである。

この「あり方」に基づくと、「返し」の基本は例えば、①頷き、②相槌、③オウム返し、④問い返し、の4つが挙げられる。これらの「返し」は「授業コミュニケーション力」「一瞬の対応力」の多くの項に関わることが分かるだろう。自身が行っている種々の手立てについても同様に考え意味付けてみてほしい。

5 「学習意欲を高める」ということ

「学習意欲」というと、とにかく授業の導入部を話題にすることが多い。しかし、学習意欲は授業（学習活動）の全てにわたるものである。そこで、授業を大きく「導入」「展開」「まとめ」の3段階に分け、各段階での「学習意欲を高める」ことについて述べる。

導入では「おもしろそうだ」「なぜだろう」「やってみよう」といった興味関心や疑問を持たせることが重要である。とともに、それらを学習問題に集約させ、学習の見通しを持たせて展開部に繋げていく。この学習問題が子供たち自身の問題意識や切実感・必要感から導かれたものであるかが重要である。子供たちにとって、教師が学習問題を唐突に提示する授業は、以降が「先生に付き合う（付き合わされる）時間」に陥ってしまう。

学習問題は基本的な「WHY型（なぜ～）」「HOW型（どのような（に）～）」に加え、近年は「Let's型（～しよう）」が極めて多い。しかし安直にLet's型で済ませていると感じる授業

授業の4力	23のコンピテンシー				
授業コミュニケーション力	1) きく	2) みる	3) 話す	4) 対話育成	5) 自由な雰囲気づくり
一瞬の対応力	6) 一瞬の対応	7) 発問	8) ゆさぶり	9) ほめる叱る	10) つぶやきを拾う
意欲向上力	11) 主体性	12) ささやき	13) 興味関心	14) コーモア	15) やる意義
	16) 体験	17) 導入	18) 課題		
授業構成力	19) 教材探し	20) 省察	21) 授業構成	22) 教材研究	23) 学習習慣

図2：授業の4力と23のコンピテンシー



も少なくない。

展開では、学習問題を受けてまとめに繋げるために、様々な形態と活動を組み合わせて進めていく。例えば「個別で調べ、ペアやグループで話し合って意見をまとめ、全体で発表し合って整理する」といった場合、それらも子供たちにとって必要感があるか、が重要である。「対話的な学び」としてペア・グループを重視している学校も多いが、子供たち自身の必要感がないと「やらされ活動」になってしまう。また、「やってよかった」という充実感・達成感・満足感が重要である。それらが自信となり、「またやりたい」という次への意欲になる。

まとめでは、学習問題に対応するまとめとなっているか、が問われる。WHY型では「なぜならば～」、HOW型では「このような(に)～」となる。そしてLet's型では「～した結果、〇〇がわかった(いえる、大事だ)」まで繋げることが大事である。そうでないと活動しっ放しで終わってしまうことになる。また、「なぜそのまとめになるのか」が子供たちにとって必然性があることも大事である。唐突に教師が「今日のまとめはこれです」としてよいものではない。

学習の流れに沿って述べてきたが、全体を通して共通することがわかっただろうか。

それは、問題意識・切実感・必要感・充実感・達成感・満足感・必然性などを子供たちが持てる、ということである。そして、教師からの押し付けでなく「自分たちが進めている、つくった」と思える、ということである。それらを実感しながら「何をどうすればよいか」がわかると子供たちは自ら動く(動ける)のである。つまり、その学習が子供たちにとって「自分事」であることが大事なのである。それこそが「主体的」な学びと言える。

6 授業力向上の手立て

授業力向上に有効な手立てを三つ挙げる。

まず「授業をみる」ことである。同僚教師や他校の教師の授業を日常や研究授業から、また教育関係WEBページやDVD教材などからみて学び、自分の授業改善に繋げる姿勢を実践化・習慣化することである。「授業をみる力」は自身の「授業をする力」に連動する。

そして「授業をみてもらう」ことである。他の教師等にどんどんみてもらい、どんどん意見を言ってもらって、その意見を授業改善に生かす。即ち「公開と批判」である。

授業力は独りよがりでは向上しない。他に学ぶ謙虚な姿勢こそが授業力を向上させる。

その最大の「他」は子供たちである。子供たちの反応をよくみて、声を聞くことが大きな学びになる。筆者は研究授業等の参観時、授業終了後すぐに数名の子供に「今日の授業はどうだった?」と聞く。子供の言葉は最大の授業評価だと毎回強く実感している。

7 まとめ

「生きる力」「確かな学力」の育成。それは子供たちの学習意欲、自ら学ぶ姿勢を高めることに尽きると筆者は考えている。

最後に強調したいのは教師自身の「学ぶ姿勢」である。学ぶ姿勢を持つ教師から、学ぶ子供が育つ。逆に言うと、学ばない教師からは学ぶ子供は育たない。貴方はどうか?

《参考図書》

- 佐藤学 『「学び」から逃走する子どもたち』 岩波ブックレット、2000
- 千葉市教育センター 『達人に学ぶ授業力』 宮坂印刷、2010
- 明石要一他 『初任者教員の悩みに答える』 教育評論社、2011
- 七條正典他 『教員としてのホップ・ステップ』 美巧社、2017



教師も育つ学校を目指して

館山市立北条小学校校長 あんどう 安藤 みかこ 深佳子



1 はじめに

本校は終戦直後に校長となった和泉久雄校長の「教科あって教育ありではなく、生活あって教育あり」という考えの下、「生活の中で生きて働く力を育むという方針や子供の思考の特質を重視し、子どもが自ら求めるものじっくり取り組み、自分なりの達成感をもつに至る過程や、人との関わりや共感を育んでいく過程にずっとこだわり続け、また大切にしてきた学校」である。

教育目標は、「たくましく現代に生きる子どもの育成」である。この目標を掲げ、既に60年は経った。現代観やたくましさを捉えは時代に合わせて変わり、目標に古さを感じることはない。昨年度、創立150周年を迎え、学校の歩みを振り返る機会を得たとともに、全校が気持ちを新たに未来に向けて進んでいくことを確認した。

今回、執筆の機会を頂いたので、学校教育目標を具現化していくために特に大切だと考えている「人」「プラン」「学年経営」について述べたい。

2 一丸となって進む職員集団

学級担任の頃は、学級の子供たちが誇りであった。校長となった今は、毎日一緒に奮闘している職員が誇りである。どんな時も子供たちのために精一杯努力する職員である。時には、ベテラン職員がビシッと言うこともあるが、声を掛け合って助け合い、また、頑張っている職員を認める風土がある。職員集団の

もつ雰囲気は、学校の玄関を一步入れば自ずと伝わる。

本校の職員集団は、物事が徹底する集団だと言える。だから、学校教育目標具現化への取組についても、学校全体で協力して進められるのである。物事が徹底できることは、決して当たり前ではない。言われるからやるのではなく、一人一人が物事の背景や真意を理解し、前向きに取り組んでいるのである。

本校には、職員を育てるための言葉がある。二つ紹介する。

- ◇分担に耐え、分担に生き、分担を超える
- ◇あなたの香りのする授業を

意味を詳しく説明されたことはない。自分で考えるのである。

3 学校の核としてのプラン

本校では、北条小学校教育計画のことを北条プランと呼んでいる。昭和20年代に生活教育を重視したコア・カリキュラムを公開し、それが北条プランの始まりである。プランは実践（研究授業や通常の授業）を通して、授業者の工夫や反省が加えられ、毎年新しいものにリニューアルされている。

プランはカリキュラム管理室の660の棚に収納されている。棚は学年、教科、月別になっており、実践者の反省が書かれた単元計画の他、ワークシートや資料、板書写真等、過去から現在に至るまですべてが収められている。つまり、「あなたの香りのする授業を」と言われた多くの実践者の指導記録が蓄積されて

いる。このプランを改善、開発していくことが学校の使命である。



カリキュラム管理室にある660の棚

職員は、プラン（P）を参考に一人一実践以上、研究テーマに沿った授業を展開（D）する。細案を書き、研究グループで何度も検討を重ね、人によっては模擬授業から本時、検討（C）後の授業と、同じ時間を3回展開する。このようにして、指導力を身につけていくのである。そして、この過程を経て、プランが修正、改善（A）され、次年度（P）のプランが作成されるという流れが確立している。

4 機能する学年経営

「本校には職員室がありません。学年室があります。学年経営を主体としているからです。」と、訪問者に説明する。現在は学年3クラスとなり、学級数は多くないが、学年の考えや主体性を尊重している。

毎週金曜日を学年会の日とし、授業の進捗や学年行事等について確認、検討している。学年職員は経験の長短に関わらず、いくつかの担当する教科のプランについて提案し、今後の学習指導をどう進めるか話し合う。時には先行して授業を進め、自身の板書を提示して授業案を説明する場合もある。

学年会で話し合われた学年の取組は、学年主任会（月1回）で提案される。もし、さら

に検討する必要があるれば学年に持ち帰り、改善したものを職員会議で再提案しなければならない。例えば、最近では市内音楽会に向けた「音楽壮行会」について、担当の3学年職員から提案があった。学年主任会で時程の修正が図られ、3学年児童の発表の他に、全校で今月の歌を歌うことなどを確認した。当日は約600人が体育館に集まり、始まりの時間を静かに待つことができた。そして、学級で練習してきた歌声を体育館に響かせた。学年の思いを大切に、全校が協力するのである。

また、本校には特別支援の学年（特学年）がある。11名が（特別支援学級8、通級指導教室3）メンバーである。全児童数は減っているが、特別支援学級数、在籍者数は増加傾向にある。本校において、特別支援教育の充実は学校経営の大切な柱の一つである。特学年室では、職員同士の相談や助言が日常的に行われている。アセスメントの方法や個別指導計画の立て方、関係機関の情報など特別支援教育担当として必要な知識や技能を共有し、必要に応じて全体に発信されるなど、まさに学校における特別支援教育の拠点となっている。

5 さいごに

本校なりの仕組みや考え方の一端を紹介させていただいたが、これらは長い歴史の中で脈々と引き継がれてきたものである。

一方で、学校のシステム化はとても大切なことであるが、システムを生かすための人（職員）が何より肝要であることは言うまでもない。子供も育つが、教師も育つ。そんな学校でありたい。

何十年も働いてきた今、学校は、「子供たちのために」と心を一つに学校教育目標の具現化に向かって働くことのできる、素晴らしい職場だと痛感する毎日である。



職員が一つになる 学校づくりを目指して

県立松戸特別支援学校教頭 なかやま 中山 ただし 忠史



教頭の職務は、県立特別支援学校管理規則では、「校長（副校長を置く学校にあっては、校長及び副校長）を助け、校務を整理し、及び必要に応じ児童生徒の教育をつかさどる。」とある。この文言は管理職選考を受ける際に、頭にたたき込み臨んだ。しかし、この文言が示す内容については、正直理解しているとは言いがたく、教頭になれば分かるのだろうという程度に考えていた。

実際に教頭となると、忙しい日々が続く。毎日のように「教頭先生ちょっと良いですか」と質問や相談を受ける。教頭として最初に着任した学校は、校舎が本校と分校とに分かれており、それぞれに一人ずつ教頭が配置されている学校である。私は本校に所属し、校長と一緒に勤務していた。校舎内には、教頭は私一人なので、全て私に対応することとなる。着任したばかりで、学校の状況や生徒たちについて知らないことなどはお構いなしだ。隣に座る教務主任からいろいろと教えてもらうが、対応に追われ、目が回るようであった。さらに、年度の初めは、事務業務が多忙を極め、大量の校内向けの文書作成、教育委員会への提出書類、調査の回答作成などの業務がある。始業式を迎え、子供たちが登校してくれば、急遽対応が必要な事案が発生し、対応に追われ、仕事を処理したはずが、新たな仕事が増える印象である。何とか懸命に業務に集中して処理を進めていると、校内の状況について校長への報告が漏れ、「聞いていない」と説明を求められることもあった。なかなか

教頭としての職務を果たしていないと感じる日々が続き、頑張っているつもりだがと弱気な思いで気持ちが傾きかけている私を支えてくれたのは、同じ学校の職員であった。疲れている私を気遣い、「教頭先生がいなくなったら困りますから」と手伝ってくれることもあり、感謝の思いがあふれた。

学校経営を担っていく上で、管理職は一人一人が働きやすい環境を作り、必要に応じて職員に助言し、より良い学校作りに向け、牽引していくものだと考えていたが、お互いに支え合うことの大切さを学ぶことができた。職員が、今どんな業務を行い、どんな悩みを抱えているのか、どんな教育を目指し努力しているのか、話をしていくうちに学校の状況が分かるようになった。生徒たちの課題について一緒に考えることで生徒たちの様子を理解することにつながり、担任ではなくなったけれど、目指していくことは変わらないと気がつくことができた。むしろ担任だった頃は、かかわるのは自分の学級の生徒たちのみであったが、教頭は学校に在籍する全ての生徒たちにかかわりを持つことができるのだと喜びを覚えた。校長が示す学校教育目標の達成に向け、職員並びに生徒たちに影響力を発揮するのが教頭の職務であることを感じた。

年度の初めには、必ず校長から学校教育目標について説明があり、その実現に向けて職員一同が力を合わせて学校運営に当たっていく。校長と目指す学校像や抱える諸課題について話をすることで、学校教育目標で掲げて

いる内容を深く理解していく。教頭は、教育目標の実現に向け、校務分掌の見直しを行い、職員に対して積極的に働きかけていく。どのように行っていくか具体的な案を抱えて校長と相談し、進めていくが、これからの学校について話をしていくと学ぶことが多く勉強になる。印象的なやり取りは、校長が「日本一の特別支援学校にしたい」と強く語っていたことである。その学校は若い教員が多く、授業研究協議会などで授業を見ても改善点も多く見られることもあった。しかし、その校長は、教員の良いところを評価し、成長していけば良い授業ができる、良い教師になっていくと考えていた。確かに熱心な教員や、児童生徒たちに熱意を持って接している教員も多く見受けられた。教員と一緒に授業作りに取り組み、校長の指導の下、日本一の学校にしていくという強い気持ちになることができた。

現在の勤務校は、教頭としては3校目になり、3校で4人の校長と一緒に仕事を行った。学校経営の進め方は校長によって異なるが、自分とは異なる視点や課題に対するアプローチの仕方など様々であり、自分の考えを広げることができる。教頭としての自分の案を持ち、校長室へ行き、相談することで話が膨らみ、盛り上がることも多々ある。こんな学校にしていきたいという思いを管理職同士で共有していくことで、全職員にどのように伝えていけば良いかも見えてくる。

特別支援学校の職員の職種は多様である。管理職、教諭、栄養職員や事務職員の他に、看護師、スクールバスの介助員、調理員、学校技能員など、様々な職種の方が協力して子供たちの成長を支えている。考え方も様々だが、皆さん、大切にしている思いは同じである。しかし、異なる働き方、考え方の職員を

学校教育目標という一つの目標に向けて力を合わせていくというのは容易ではない。職員の思いをつないでいくのは対話である。職員一人一人とコミュニケーションを図り、意見を聞くことで考えを理解し、尊重し合える関係になっていくのだと感じる。また、職員数も多く、多様な職種の方がいると、求められる対応も複雑になることもある。職員から質問を受け、詳しく状況を聞いてみると、すぐには回答できないこともある。千葉県教育関係職員必携のページをめくり、インターネットを活用し、根拠を持って説明ができるようにするため資料を集めながら調べる。納得いく答えを見つけることができると、胸にストンと落ち、気持ちの良さを味わうことができる。日々勉強の積み重ねの大切さを実感する。

教頭は、本当に、忙しい日々で業務に追われるが、追われるだけでなく、職員との対話を大切にしていくことが重要である。教頭の考えや意図が、液体のように学校全体、職員の隙間に染み渡らせることができれば、職員同士をつなげ、一つの柱となり学校を支えていけるようになるのではないだろうかと考える。私は、常々、学校というのはオーケストラと同じではないかと感じている。指揮者のタクトに合わせ、様々な音色を奏でる楽器を演奏することで素晴らしい音楽を響かせるのと同じように、校長がタクトを振り、様々な長所、得意とする専門性を有した職員が存分に力を発揮することで、特色ある学校の姿、高い専門性を発揮した教育力を見せることができるのではないかと考える。教頭である私は、そのプロデュースを行い、職員全体が力を合わせて学校づくりに励むことができる一つのチームとなるように、日々、学校の中を走りながら邁進している。



教務主任としてできること ～「チーム中根」を合言葉に～



いすみ市立中根小学校教諭 **岩瀬 和也**

1 はじめに

本校はいすみ市の北部に位置し、周囲には田畑が広がり自然豊かで、静かな環境にある。全校児童は88名で、保護者や地域の方々に温かく見守られて学習活動に取り組んでいる。

本校5年目、教務主任としては2年目になる。ミドルリーダーとして、組織（チーム）をつくることの難しさと重要性を感じている。校長のリーダーシップのもと、「チーム中根」を合言葉に全教職員で教育活動に取り組んでいる。

2 教務主任としての取組

(1) 学力向上に向けての取組

① 学校全体で統一した学習規律

学級担任の半数が20歳代、30歳代で、経験年数も浅い教員が多い。学校規模が小さいため、各学年単学級であり、初任者であっても学年主任になる。学習指導において、若手からベテランまで、大切にしなければならないこと（学習規律）を学校全体で確認し、統一して取り組むこととした。そこで、中根小学校「学びの5つのルール」「ノートの書き方」を作成し、全校で取り組んでいる。

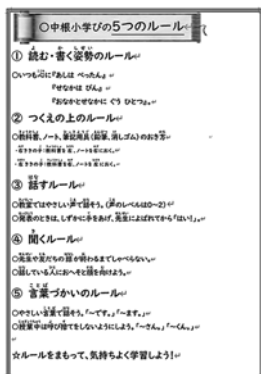


図1 学びの5つのルール

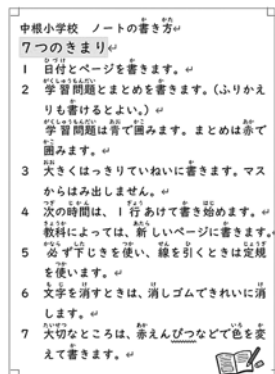


図2 ノートの書き方

② 授業について（みんなで取り組む授業改善）

(ア) 令和5年度全国学力・学習状況調査問題分析（5月）

児童の調査終了後、全教職員に調査問題を配付し、問題を解いた。そして、正答率が「高い問題」、「低い問題」がどれかを予想し、アンケートフォームを使い、回答を集めた。その結果を分析し、出題の意図、児童に求められる力について、全教職員で考えた。

国語では、「読み取った内容を理解し、問題の言葉や自らの言葉でまとめる力」「自分の考えを文章に表す力」が求められている。また、算数では、「日常生活に置き換えて考える力」「自分の考えを説明する力」「複数の資料から必要な資料を選んで答えを求める力」が求められていると考えた。これらの力を、授業で身に付けさせていくことが望まれていることだと共通理解した。

(イ) 「中根小授業改善のためのセルフチェックシート」の活用

千葉県教育委員会から推進されている『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』をもとに「中根小授業改善セルフチェックシート」を作成した。「授業づくりの視点」「自身の授業を振り返るための視点」「授業参観の視点」として活用している。セルフチェックシートは「STEP 1」「STEP 2」「STEP 3」の3種作成して、段階的に少しずつ改善できるようにしている。月に1回活用し、週案に綴じこみ変容が分かるようにするとともに、シートを活用し、授業を行う全教職員で授業改善に努めている。また、本校で

は、授業づくりの合言葉を「中根」の文字を用い、「な」㊦んだらうと問いをもち、「か」自分で㊦んがえて、㊦んがえは広げて深めて友達と、「ね」㊦らいが根付くようにとして取り組んでいる。

(2)働き方改革の推進

①退勤時刻申告シートによる意識改革

出勤札、出勤簿の近くに退勤時刻申告シートを掲示し、自分の名前が書いてあるマグネットで知らせるようにしている。これは、勤務時間を意識付けることを目的としている。「〇〇先生は、今日5時までだ。」と全教職員が分かるようになっている。管理職も「〇時までがんばろう。」「〇時にみんなで退勤しよう。」と職員に声を掛けやすくなっている。

②職員会議資料のペーパーレス化

これまですべて印刷していた職員会議資料はデータ共有にし、印刷・綴じこみの時間をなくした。また、データは共有フォルダを使用し、PDF化しているので、事前に資料の確認ができるようになった。そのため、事前に読み込んだ上で会議を行うことができるので、会議時間の短縮にもなっている。さらに、データを確認し、会議を進めるときに修正が必要な場合は、その都度修正ができることも時間短縮になり、作業効率が上がっている。

③アンケートフォームを活用した欠席・遅刻連絡

これまで児童の欠席・遅刻の確認は、主に電話対応であった。多い時には10件以上の対応もあった。朝の慌ただしい時間帯の電話対応は改善が急務であった。そこで、欠席・遅刻の確認にアンケートフォームを活用した。すると、朝の電話対応がほぼなくなった。ここで生み出された時間は、児童の指導に当てられるようになった。

また、インターネットの環境があれば、教室にいても担任は遅刻・欠席する児童の把握

ができるようになった。そのため、職員室へ行き来することや内線でのやり取りすることを減らすことができた。



図3 アンケートフォームによる遅刻・欠席 連絡

(3)フットワーク軽く動く

教務主任は、教職員と管理職をつなぐ立場である。そのため、学校の現状を把握し、課題解決できるように、フットワーク軽く動くことを意識している。

職員室で仕事をしていると、学級担任から援助やアドバイスを求められることがある。そのような時は、すぐ教室に行き、解決できるようにしている。そして、管理職への報告・相談・連絡を迅速、丁寧、確実にすることも大切にしている。また、若手の教職員から教科指導、生徒指導に関する相談もある。その際は助言するだけでなく、実際にやってみせることを大切にしている。

共に取り組むことで信頼関係が生まれ、チームとして機能できるようになっている。

3 おわりに

校長・教頭をはじめとする教職員に支えられ、現在の職務ができています。これからも、教職員のつながりを大切にして、「チーム中根」の中核となり、学校を動かすことができるようにしたい。さらに研鑽を積み、職務に邁進していく所存である。



自ら思考し、 表現する力を高める取組



松戸市立第五中学校教諭 いしかわ 石川 まさる 賢

1 はじめに

数学の教員になってから今日まで、授業をしていてずっとテーマにしていることがある。それは、「授業で考える力を生徒にどう身につけさせるか」ということである。現在の評価でいうところの「知識・技能」の力に関しては、たとえば、計算問題や数学の用語などを問う問題を、授業の始めに5分程度小テストのような形式で毎回くり返し行えば、どの生徒にもある程度力が身についたと感ずることができた。しかし、「思考・判断・表現」の力に関しては、どのような方法で授業を行えば、生徒に力を身につけさせられるか具体的な方法がすぐには思いつかず、様々な方法を実践してもなかなか手応えを感じることができなかった。そうした中で、今現在も「考える力」を生徒に身につけさせるために様々な取組を実践している。



2 現在行っている取組

(1)「なぜ」と問い返す場面を意図的につくる

なぜ「考える力」が生徒に身につかないのか考えたときに、計算力をつけさせるときと同じように毎回の授業で力をつけさせる取組を行っていないからだ気づいた。しかし、方程式の文章題のような問題を、毎日小テスト形式で行うのは時間的にも難しい。そのため、毎回の授業で生徒に自分の考えを発表させる場面を意図的につくるようにした。たとえば、1年生の文字式の授業で、式の値という学習内容がある。この授業では、生徒とのや

りとりの中で、以下のようなやりとりを行い、生徒に自分の考えを発表させるようにしている。

教師	“ $x = 2$ のとき、 $3x$ の値はいくつですか。”
生徒	“6 です。”
教師	“なぜですか。”
生徒	“ $3x$ は $3 \times x$ のことなので、 $3 \times 2 = 6$ になるからです。”


このようなやりとりをほぼ毎回の授業で行うことで、まずは口頭で説明することが少しずつできるようになっていく。そうすれば、生徒がテストでも正しい解答を記述できるようになると考えた。しかし、ただ発表させるだけだと、発言する生徒に偏りが出てしまうため、指名した生徒が説明したり、グループ学習を取り入れ、生徒同士が自分の言葉で説明したりする場面をつくっている。

(2)生徒に記述をさせる

「なぜ」と問い返す場面を意図的につくることで、ほとんどの生徒がある程度口頭で説明することができるようになったが、テストの記述式の問題を見てみると、正しい解答にたどり着く生徒の数にあまり変化はなかった。そこで、次に考えたのが、生徒に授業の中で記述をさせることだった。現在の評価の観点にある、「主体的に取り組む態度」を評価するために、授業の振り返りを生徒にさせている先生方も多いと思うが、授業の進度もあって十分な時間がとれなかったり、宿題になっていたりしていないだろうか。実は自分もそ

うである。そうすると、取り組まない生徒は全く取り組まないで、自分の考えを記述する機会がなくなってしまう。そのため、授業の中で生徒に自分の考えを記述する場面をつくるように意識して授業を行っている。たとえば、1年生の方程式の授業で、等式の性質という学習内容がある。この授業では、以下のようなプリントを使って授業を行っている。

問題 右のようなつり合っている天びんについて、次の問いに答えなさい。



① 左側の皿に1円玉を3枚のせたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

② 左側の皿から1円玉を2枚取り除いたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

③ ①、②から考えると、左側の皿にあるものを2倍に増やしたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

④ ①、②から考えると、左側の皿にあるものを半分に減らしたとき、天びんがつり合うためにはどうすればよいでしょうか。

◇ ①～④のことを等式に置き換えて考えると、どんなことがいえますか。

記述をさせるとなると、難しいことのように感じてしまうかもしれないが、簡単なことでもよいので、まずは記述をさせることが大事だと考えている。プリントでは、等式を天びんに見立てて、等式の性質を見いだすという内容だが、プリントの①から④のような簡単な問いでもよいので、とにかく生徒に記述をさせる。小学校や中学校の理科の授業で天びんを使ったことがあるため、①であれば、“右側の皿にも1円玉を3枚のせる。”のように、ほぼ全ての生徒が書くことができた。そして、最後に◇のところに取り組むのだが、ここで数学に帰着させる。ここでも、“ある数を左側にたしたり、ひいたり、かけたり、わったりしたときに、同じ数を右側にたしたり、ひいたり、かけたり、わったりすれば、等式が成り立つ。”のように、これもほとんどの生徒が自分の言葉で書くことができた。また、

その際に、テストで正しい解答を記述できるようにするため、左側を“左辺”、右側を“右辺”のように、数学の用語を使って記述するよう指導している。

(3)全国学力・学習状況調査を活用した授業

3年生を対象に毎年行われる、全国学力・学習状況調査。その結果を数学科の教師で毎年分析して報告していると思うが、“短答式や選択式の問題の正答率は平均と同じぐらいだが、記述式の問題の正答率は平均を下回る。”という報告が多いのではないだろうか。記述式の問題の正答率を上げるため、様々な手立てを考えるのだが、これがなかなか難しい。なぜならば、全国学力・学習状況調査で出題される記述式の問題は、出題形式が少し特殊であり、普段の授業では扱うことがないからである。それならば、普段の授業でも取り入れてみようということで、授業の中で全国学力・学習状況調査の問題を活用した授業を実践してみた。具体的には、1年生の比例・反比例の授業で、令和3年度の全国学力・学習状況調査⑦の問題を取り上げた。やはり問題の出題形式に全く慣れていないため、どのように解答して良いかわからない生徒が多かった。しかし、実践してみる価値は十分にあると感じた。今後も、定期的に全国学力・学習状況調査の問題を扱っていきたいと思う。そして、今の1年生が2年後に全国学力・学習状況調査を受けたときに、今の2、3年生の結果と比べて、記述式の正答率に違いが出ることを期待したい。



3 おわりに

これまで様々な実践をしてきて感じたことは、「考える力」を高めるためには、普段の授業の中で自ら思考し、表現する場面を生徒にどれだけ多くつくることができるかということである。これからも研究し続けていきたい。



授業づくりのヒントは近くにあり!! 子供の言い訳から学ぶ、深め合う授業づくり



四街道市立吉岡小学校教諭 ひらさわ 平澤 あきおみ 昭臣

1 はじめに

主体的・対話的で深い学びが繰り広げられる授業に必要なことは何か。教師の永遠のテーマである。私も常に試行錯誤をしながら、日々授業づくりを行っているが、意外なところにヒントがあることに気づいた。それは、我が家における子供たちの父親に対する言い訳である。

我が家では、父親である私が子供たちに注意をすると、必ず「でも」「だけど」「なんで」という言葉が返ってくる。素直な返事を聞いたことはまずない。そのような言葉が返ってくるので、父親として我が子に「でも」「だけど」「なんで」に対してわかりやすい、そして納得する話を一生懸命考える。この瞬間こそが思考の深まりである。そして、自分なりの考えをまとめ、相手に納得するまで話す。このやり取りを授業で行うことができれば、より考えが深まり、活発な意見交換が行われる授業が展開できるのではないかと考えた。以下、「でも」「だけど」「なんで」の使い方のルールや実践例を紹介する。

2 実践内容

(1) 友達の意見に対する反応の確認

私の実践は、ただ一つ。それは、「でも」「だけど」「なんで」というキーワードをいかに授業で子供たちに広げてもらうか、それだけである。ただ、何でもかんでも「でも」「だけど」「なんで」と言えばいいわけではない。「でも」「だけど」「なんで」以外の発言も大切にしたい。私のクラスでは、友達が意見を

発表したときの反応で「同じです」「いいです」「など」と言いたいという決まりはない。友達の意見を聞いて、自分なりの反応の仕方をするように声を掛けている。共感できるのであれば、「そうだね!!」、驚いたときには、「おお～!!」、すごくいいなと思ったときは「拍手!!」など、子供たちは感じたままに反応する。そうすることで、型にはまった授業から、子供たち自身で作りに上げていく授業の雰囲気ができあがっていく。

表1 子供たちの反応例

「いいね」「なるほど」「たしかに」「そうそう」 「おお～」「そうだね」「拍手」など
--

(2) 「でも」「だけど」「なんで」の注意点

子供たちには、「でも」「だけど」「なんで」という言葉を使うにあたって注意しなければならないことを2つ伝えている。それは、「使う前に必ず相手の意見を認める発言をする」と「使い方が間違っていた場合、先生が止めることもある」である。「〇〇さんの意見も良いのだけどさ～」「〇〇さんの意見もすごく良くわかるよ。でもさ～」など、相手の意見をまずは認めることで、共感的な雰囲気をつくることができる。「止めるポイント」も明確で、「でも」「だけど」「なんで」が思考を深める問いになっているかということだけである。意地を張っているだけ、感情的な「でも」「だけど」「なんで」になっている場合、教師がきちんと止めることで、正しい「でも」「だけど」「なんで」の使い方を学ぶことができる。はじめは、感情的になっている子供が

いたとしても、「間違えではなく、それだけ授業に熱中しているという証拠だね」と、声を掛けるだけで子供は喜んでくれる。どんな発言をしてもまずは褒めていくことを心がけた。止めるかどうかの判断は感覚的で、難しい面もあるが、実践していく中で教師、子供ともに感覚を掴み、成長し、自分たちのクラスがより深まりのある学びの場となることで、さらなる学習意欲の向上に繋がるといよいよサイクルを生み出していくことができた。まずはやってみることが、お互いの成長に繋がることも実感した。

(3)大切なノート整理

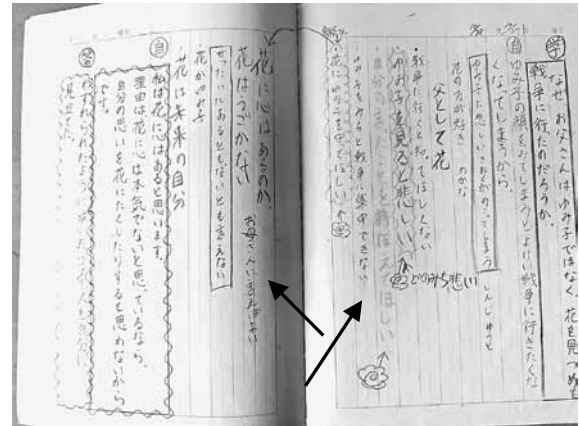
どの教科の授業においても常に「でも」「だけど」「なんで」のキーワードを活用した授業づくりを行ったことで、子供たちは授業で活発な意見交換ができるようになった。一方で、意見を言って終わりではなく、黒板に自分たちの意見が書かれた後は、必ずノートにまとめる時間（7分～10分程度）をとるようにしている。板書を写すとき、子供たちには3つのポイントで指導している。

- ① 時間内に書き写す
- ② 全て書き写すのではなく、キーワードにしてまとめる。（難しい子供もいるので、まずは全部書き写すでも可とする）
- ③ 書き写す中で、自分のつぶやきを書く

流れるように意見交換が行われると、思考の整理ができない子供も多い。大人でさえ、静かな時間の中で、判断するということがよくあることである。子供たちには、「ノートにまとめる時間＝静の時間」という認識をもたせ、この静かな時間（書いている鉛筆の音だけが聞こえる空間が理想）で思考を整理するようにしている。最初は、ただ書くだけで精一杯だった子供も、慣れてくると、だんだん時間内に自分のつぶやきまで書けるようになってくる。また、なかなか授業で発言でき

ない子供は、ノート指導で活躍の場がもてるように支援している。

つぶやきを書いている子供のノート



3 実践例

以下、4年生道徳「絵はがきと切手」の授業の実践例を簡単に紹介したい。

教師の問い⇒「自分がひろこさんなら、友達に料金が不足していたことを伝えますか」

最初、伝えるという意見が多かったものの、「友達がまた同じことをしてしまうから」など、あまり深みのある理由は出なかった。

深まった児童の発言⇒「友達に料金不足を伝えるということも大切だけどさ、本当に友達を目の前にして、伝えることできる？」

この意見に対して、「本当の友達だからこそ、伝えるべき」という意見が出た。そこからさらに「本当の友達だからこそ、伝えない」という意見も出て、多くの子供の中に「本当の友達とは何か」という思考の深まりが見られ大議論となった。

4 おわりに

まさか、我が子の言い訳語録が、授業づくりのヒントになるとは思ってもみなかった。

生活の全てにヒントはある。これからも、子供たちが「もっと発言したい」「授業が楽しい」と思ってもらえるような授業づくりを心がけていきたい。



学習意欲の向上が 生徒の主体性を引き出す



柏市立土中学校教諭 やなか 谷中 まさゆき 正幸

1 はじめに

コロナ禍を経て、子供たちが「自ら進んで学ぶこと」の重要性が注目された。そこには学習するための課題がないと、「自らは学ぶこと」ができない子供たちの姿があった。このことは報道されたこともあり、子供たちが主体的に学ぶ姿勢を身に付けることの大切さを1人の教員として痛感した。

子供たちが、「自ら学ぶこと」を実現するには、学ぶことが「楽しい、面白い」ということをきっかけに、「もっと知りたい、やってみたい」という子供たちの内側から湧き出る意欲を高めていくことが必要である。

子供たちの学習意欲の向上を目指すためには、「子供たちに任せていく場面が多い」授業を実践する。自分で取り組む学習活動を増やしていくことで、その先に協働的な学びを経て、深い学びにつながると考える。そのため、子供たちが主役の授業を実現することが最初の一步であると思う。

2 実際の授業から

「自ら学ぶこと」を実現するには、生徒に任せることが大切である。しかし、教師側は任せていくことと丸投げすることの違いを理解することが大切である。「任せる」には、指示と自由の範囲が明確である必要がある。反対に、「丸投げ」は、指示があいまいなことが多い。そのため教師側は、学習内容のゴール地点を確実に示し、そのゴール地点にたどり着くための「学びの地図」を子供たちに提示することが、ファシリテーターとしての役

割の一つである。

(1)授業+課題学習

子供たちが「自ら学ぶこと」を習得するために、1学期の前半に行う授業形態が、授業+課題学習である。授業時間の前半が、子供たちが教師とのやり取りから資料の扱い方を学ぶ段階である。後半では前半の学習内容の確認や発展的な課題を設定する。この段階では、班を中心としたグループでの課題解決に取り組む。

課題学習では、教師は子供たちの取り組んだ成果をハンコなどで評価を行う。個人の評価ではなく、グループ全体の評価を行うことで、苦手意識のある生徒の学習意欲を高めることを目指す時期である。

(2)課題学習

1学期の後半に行う授業形態が、課題学習である。この頃は、資料の扱い方についてある程度学習したため、教師が学習課題を確認した後は、課題解決に向けて子供たちで学習を進める。学習方法は生徒が選択する。個人か、グループか、と学び方を選択できることは、必要な時に必要な学び方を選択する力を養うことにつながる。

評価に関する課題として、個人評価の場面を増やすことで、ハンコ等の評価を時間内に獲得できない生徒が一定数生じることが挙げられる。その対策としては、授業後にフォロータイムを設定して対応する。個人評価になることで、課題解決が達成できずに学習意欲が低下する生徒を支えることが目的である。

(3)自由進度学習

この授業形態は、単元の学習課題を設定し、単元を貫く課題で学習内容を活用して、まとめる作業を設定する。

子供たちが自ら学ぶことを実現するための「自由進度学習」を行うには、ファシリテーターとしての教師が、子供たちが迷わないように、「学びの過程を示した地図」を提供することが必要となる。

公民教科書P6～23 現代社会の特色と私たち・私たちの生活と文化	
1 (ロングレッシン) 2030年、日本はどのような国になるのか？ →現代社会の特徴をつかみましょう！	見通し・問いをもつ
2 【自由進度学習】ミニレッスン5分 振り返りの時間5分 【単元を貫く課題】2030年、日本はどのような国になるのか、預言書を作成しよう！ →スライドで作成すること。(全3ページまで) 【チェックポイント】 ①現代の日本の社会にはどのような特色が見られるのだろうか。(P8～17) ②伝統や文化は私たちの生活にどのような役割を果たしているのだろうか。(18-21)	学習サイクルを回す
3 ③多文化共生を実現するために、私たちが取り組むべき課題は何か。(22-23) 【確認テスト】※2～4の時間内であればいつ受けてもOK	
5 まとめの発表と学びの振り返り(持ち時間1人5分程度) 【単元を貫く課題】2030年、日本はどのような国になるのか、預言書を作成しよう！ →各組で、個人で作成した預言書を発表しましょう！	伝える・共有

自由進度学習のための学びの過程を示した地図

特に自ら学ぶことに不慣れな子供たちは、何をどのように学習すればよいか判断できないことが多い。そのため、取組初めは生徒の学びを誘導するようなチェックポイント(必ず学習してほしいこと)を示すことで、不安感を和らげ、学習に集中できるようにする工夫が必要である。

子供たちが「自由進度学習」に慣れてきた頃、チェックポイントを教師側から示さず、教科書のページごとに「何を学ぶのか」「どんなことをわからないといけないか」についてグループで情報を共有することで、生徒たちが各自でチェックポイントを設定し、課題解決に取り組むという、個別最適化を目指した授業を展開する。

この授業形態では、子供たちが自ら選択し、

決定する範囲が広がる。子供たちの興味関心に基づいて詳細に調べることも可能であることから、意欲的に学習を進める様子が見られた。

日本国憲法が今と異なる点について調べる	憲法の重要性	平民主権のために何をしているか	日本国憲法の目的と日本国憲法の内容について	2つの憲法に関する事象と憲法の違いを調べる	日本だからその憲法	国民主権に変わった理由	憲法の形式が変わった理由	それぞれの憲法の悪い点と良い点	日本国憲法施行までの道のり
国民主権の必要性	人権の保障	基本的人権の尊重とは	憲法を作ったGHQの作ろうとした日本の有様	憲法による国民への影響	平和主義とは	天皇の国事行為	憲法の三つの基本原則	日本国憲法と大日本帝国憲法の相違点	子供の権利、人権、基本法
日本国憲法が今と異なる点について調べる	日本国憲法の土台	なんで天皇作った	日本国憲法の特徴	自治体ごとに何をやっているのか	国民主権とは具体的にどのようなものがあるか	天皇が主権者から象徴に変わった理由	権利の重要性	三権分立を採用	憲法で重要なポイント
仏教の憲法を調べる	それぞれの憲法を比較しよう	樹立点から思想の違いを見よう	その憲法の目的を見よう	天皇と憲法の関係	法の下の平等の重要性	大日本帝国憲法の特徴	人権と憲法は関係があるのか	三権分立の仕組みと利点	それぞれの憲法の重要点
日本の政治のしくみ	国民主権と日本国憲法との関係性	憲法作られた理由	大日本帝国憲法について調べる						

チェックポイントづくりのための情報共有

3 おわりに

私は子供たちが「自ら進んで学ぶこと」は、一朝一夕にできるようなものではないと考える。だからこそ、教師として手立てを考え、子供たちに学び方をつかませていくための工夫が必要である。教師の工夫によって「正解のない問題・課題」に果敢に挑戦する未来の大人の姿が、子供たちから見えることがある。その姿に私は、頼もしさを覚えるとともに、日々の実践の大切さを感じる。

社会の情報化が進み、教師もその恩恵を受けて多くの授業実践を手軽に入手できる時代になった。社会の変化から多くの授業方法やネタを持っている教師より、目の前の子供たちに合わせた授業方法を選択できる教師が、これからの教師としての一つの在り方と思う。

【参考図書】

- 「協働する探究のデザイン 社会をよくする学びをつくる」著者 藤原さと(2023年5月24日)
- 「超具体！自由進度学習はじめの1歩」著者 難波駿(2023年2月24日)

国語

地域単元を通して問題解決能力を育む書くことの学習**- 企画書づくりにおける学習プロセスを踏まえた個別支援 -**長生村立八積小学校教諭（前茂原市立東郷小学校教諭） おおたわ ひろこ 太田和 紘子

予測困難な時代を生き抜く児童にとって、問題解決能力を身に付けていくことが求められる。それらに対応するために、①学習プロセスを通して問題解決能力を磨き、効果的に言語操作して書く力を育成すること、②学習プロセスに即した支援と学習形態の工夫を通して、個別最適な学びを充実させること、③地域教材を扱い書くことを通して、地域の問題を自分事として捉え、深く関わろうとすること、の三点を視点とし、地域を教材として第6学年を対象に書くことの研究を行った。これらの方法が、地域への理解を深め、問題解決能力を磨き、言語操作をして書くことの力を高めるために有効であることがわかった。この研究を地域の教育研修会等で紹介し、多くの先生方にご活用いただきたいと考える。

社会科

**児童の社会的な見方・考え方を働かせ、
地域と産業を往還する力を育てる社会科指導****- 特殊性と共通性から異なる産業を関連付けた探究学習を通して -**旭市立鶴巻小学校教諭（前干潟小学校教諭） えんどう まなぶ 遠藤 学

現代社会において見られる産業間の関わりを教材とした産業学習を行いたいと考え、研究を始めた。本研究では小学校第5学年社会科の産業学習の単元において、地域学習と産業学習を組み合わせた単元開発を行い、児童が個人レベルではなく社会レベルで産業を捉えることができるようになることを目指した。

検証授業では、産業従事者の工夫や努力として、旭市における農業・畜産業・工業の産業間の連携を教材に学習を行った。その結果、児童は産業を盛んにする要因や利益追求のあり方など、産業に関する概念的知識を身につけることができた。今後は、どの市でも置き換えることができる地域の産業間の連携を扱った産業学習単元を開発していきたい。

社会科

**歴史的思考力を育み、
現代社会へといかす社会科学習の在り方****- 戦後の高度経済成長の転換点となった水俣病の学習を通して -**南房総市立白浜中学校教諭 おぐら ともひろ 小倉 智浩

「なぜ歴史を学ぶのか。」「歴史で学んだことを、どのようにいかすのか。」等、歴史を学ぶ意義や歴史の活用方法を理解している生徒が少ないという実態が、本研究を始める動機付けとなった。そこで、中学校第3学年社会科、歴史的分野のまとめ学習「歴史に学び、未来へと生かそう」において、水俣病を教材化し、歴史の教訓を現代社会の課題解決にいかす単元開発をした。それと同時に、歴史学習で必要とされている「歴史的思考力」を育成する学習方法についても研究を進めた。本研究成果として、生徒は歴史を学ぶ意義を見出したり、多様な価値判断をしたりすることができた。今後は、日々の授業実践や社会科の研修会等で、本成果を広めていきたいと思う。

理科

中学校3年「仕事とエネルギー」の学習における 深い理解を生み出す授業づくり

成田市立公津の杜中学校教諭（前成田中学校教諭） はやし ひろき 林 宏樹

千葉県公立高校入試では、令和2年度から2年連続で物理分野の正答率が最低であった。そこで物理分野における深い理解を得るため「仕事とエネルギー」の授業において、実験キットを用いた“斜面を転がる鉄球のコース作り活動”を取り入れた補充授業を行い、効果を検証した。その結果、力学的エネルギーの変化に着目した説明ができるようになった生徒が増加し、授業後に実施した調査問題では正答率が大きく上昇した。これらから、生徒自身が試行錯誤できる実験を取り入れることで、生徒の「深い理解」の実現に繋がることが分かった。今後は、生徒が自ら試行錯誤できる実験をどの授業に取り入れることが効果的かを研究し、“深い理解を生み出す授業”を広めていきたい。

体育科

児童が素早く走りだすことができるリレー学習の研究 -バトンパス時におけるスタンディングスタートの姿勢分析をもとに-

市原市立青葉台小学校教諭（前木更津市立南清小学校教諭） の も と りょうま 野本 竜馬

バトンパス時において、児童が素早く走りだすことができるスタート姿勢及び、これを身に付けるための指導法を明らかにしたいと考え、第6学年を対象としたパワーポジションを追求していく「短距離走・リレー」の実践を行い、姿勢分析を行った。その結果、目標としていた全員のリレータイムが向上した。その上で、全身前傾及び上体前傾に有意な差が見られ、上位群のデータをもとにスタート姿勢の指標を示すことができた。また、前傾を視覚的に把握できる教具及び、走りだしの判断を易しくした教材は、バトンパス時においても素早く走りだす姿勢を身に付けるための有効な手立てとなることがわかった。今後は、前傾角度以外の他の要因からも走りだしの研究を進め、指導の具体化を図りたい。

体育科

運動の生活化につながる体づくり運動の学び方 -デジタルログを用いた自己調整学習を通して-

富津市立天羽小学校教諭 なかの きょうへい 仲野 恭平

本研究では、自己の体力や運動習慣の数値化と可視化に着目し、「運動の生活化」を実現するため、デジタルログを用いた自己調整学習を行った。体づくり運動の学習で「遊びの創作」、授業外で運動習慣の「ログ」をとる活動に取り組んだ。その結果、児童自ら運動習慣を調整し、活動量の向上が認められた。また、体の調整力を向上させるための知識、運動技能の向上も見られた。成果として、活動量や能力の可視化によってメタ認知が促され、学びが調整されたこと、更に、授業内外問わず進んで運動遊びに取り組み、技能や運動有能感が向上したことが挙げられる。今後、長期的な取り組み方の検討と、他領域での有効性や汎用性を探り、研修会等で報告し広めていきたい。

総合的な学習の時間

地域の課題に目を向け、 地域のために行動できる児童の育成 -協働的な学びを取り入れたESDの推進を通して-

鴨川市立田原小学校教諭（前天津小湊小学校教諭） たつま 辰馬 もとつぐ 基倫

前任校のある鴨川市天津小湊地区は、過疎地域に指定されており、「持続可能な社会」として在り続けることができるかどうか問われている地域である。そこで、本研究では、地域の課題に目を向け、地域のために行動できる児童の育成を目指して、個人の能力の発揮による協働的な学びを取り入れたESDを推進した。その結果、児童は地域に対する思いを育んだり、地域の実態を再認識したりすることができた。また、地域の課題に目を向け、地域のために考え、行動しようとする意欲や態度が身に付いた。今後も個人の能力の発揮による協働的な学びを取り入れたESDを推進し、課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を育むために励んでいく。

生徒指導

集団で自己肯定感を高める、積極的な生徒指導の在り方 -総合的な学習の時間における地域交流学習を通して-

県教育庁南房総教育事務所指導主事（前木更津市立八幡台小学校教諭） もりやま 森山 すすむ 晋

日本の若者は、諸外国と比べ、自己肯定感が極めて低いことが様々な調査結果から指摘されている。予測困難な未来に向けて、子供たちがよりよい自己実現をしていくために、自己肯定感は土台になると考えた。そして、生徒指導の視点から、自己肯定感を高める実践をしたいと考え、本研究に至った。検証授業は、総合的な学習の時間で小学6年生を対象に実施した。単元名は「みんなでチャレンジ！地域貢献！」で、地域の課題解決に向けて、児童と地域の人々が協働する実践である。検証授業の成果として得られた「共有体験」「視野の広がり」「他者から認められる体験」「達成感」「自己効力感」の視点を活かし、他の単元や教科での授業を開発・実践・発信していきたいと考えている。

現代的な教育課題

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図るための ICT機器活用ができる教員の育成と研修の実践的研究 -デジタルログを用いた自己調整学習を通して-

我孫子市立湖北台東小学校教諭 かねこ 金子 たくろう 拓郎

教員が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を目的としたICT機器活用を行えるようになるための情報共有や研修体制づくりの開発、提案をした。アンケート調査とインタビューでそれぞれの教員が抱える課題を明らかにし、個別の不安やニーズへの対応を検討・実践した。教員のICT機器活用状況を数値化し、イノベーター理論により教員を五つのグループに分類し、分類されたカテゴリーの特性に合わせた研修を行うことで、教員同士で実践例や相談内容を共有しやすい状況づくりを行った。その結果、児童と教員共に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業場面でのICT機器活用頻度が向上した。今後は校内だけでなく市や県に広げていけるような情報共有につなげていきたい。

現代的教育課題

オンラインを活用した 探究的な学びを深める単元モデルの開発 -外部人材による学習支援の取組を通して-

市原市教育センター指導主事（前牧園小学校教諭） ^{あくつ ひろたか} 阿久津 大貴

現在、これまでにない速さで社会は変化している。これからの学校は、そのような社会を生きていく子供たちに必要な資質・能力を育むため、「学校ならではの価値ある経験」を提供することが求められている。そこで私は、小学校高学年を対象に、「オンラインを活用して外部人材と高頻度かつ双方向のかかわりをもつことで、探究的な学びを深めることのできる単元モデルの開発」を行った。単元は、主にプロジェクト学習の考えを生かして、外部人材と協働して地域の歴史・文化の魅力を動画にまとめる活動を軸に構成した。学習のゴールは、地域の博物館公式YouTubeアカウントでの動画発信である。オンラインでの外部人材活用モデルの一つとして、参考としていただければ幸いである。

特別支援教育

特別支援学校（知的障害）における 保健体育に関する実践研究

-生涯スポーツの基礎を培うアダプテッド・スポーツと授業の関連と効果-

県立湖北特別支援学校教諭 ^{うしじま だいご} 牛島 大悟

本研究では、生涯スポーツに向けた取組やアダプテッド・スポーツの必要性について明らかにするために、特別支援学校（知的障害）高等部の教職員に向けて調査を行った。また、アダプテッドの視点を整理して授業実践を行った。

その結果、教職員の生涯スポーツに向けた取組や認識が明らかとなり、授業実践においては生徒を対象とした授業前後の調査より、運動意欲やアダプテッドの視点の必要性についての変容が見られた。また、教職員のインタビューから、生涯スポーツにより目を向けた取組の重要性が示唆された。実践や情報については、「アダプテッド・スポーツ教材・教具アーカイブ」にまとめたものを活用していきたい。

企業等派遣研修

企業の経営理念を学校経営に生かす

県立夷隅特別支援学校校長（前富里特別支援学校教頭・前大網白里特別支援学校教頭） ^{おちあい おさむ} 落合 修

学校は、新型コロナウイルス感染症対策や働き方改革、組織マネジメント、不登校など様々な問題に直面し、対応や改革を迫られている。派遣先の「株式会社三日月（龍宮城スパホテル三日月）」は、コロナ禍でありながら「お客様ファースト」であり続けるためのノウハウを持ち、企業努力を重ねながらホテル業務を継続している。私はホテル各部署での研修を通して、企業の経営理念やマネジメント、お客様への対応、連携等について学んだ。ホテルのホスピタリティ（おもてなし）の精神に基づいた経営は、「すべては子どもたちのために」という学校経営につながる。「明るく元気に楽しく学べる学校」をつくるために、研修で学んだ企業理念等を生かし、チーム学校で対応していく。

千葉大学大学院長期研修で学んだこと

袖ヶ浦市立根形中学校教諭（前蔵波中学校教諭）^{のむら}野村 ^{ゆみこ}裕美子



1 研究テーマ

千葉大学大学院（修士課程）派遣長期研修の機会をいただき、千葉大学大学院教育学研究科理科教育の山下修一教授の研究室で、令和2年度から2年間研究を行った。

私の研究は、理科の地球領域で地域教材を活用した教材開発である。山下研究室では、コア知識と、発展的な課題の読み物教材の活用研究を行っている。「コア知識」とは、山下教授が提唱したもので「幅広い現象に適用できる確固とした知識で、一貫した説明がしやすいように操作を加えたもの」である。読み物教材とは、既習内容とコア知識を組み合わせることで発展的な課題を解決できる手助けとなるものである。読み物をとおして学習を振り返ると共に、発展的な課題について情報を整理し、理解を深め、科学的に説明できるようになる。

理科の地球領域では他の領域と比べてコア知識と読み物教材を取り入れた実践は少ない。そこで私は、地球領域の地域教材として、天然ガスに着目した。千葉県には水溶性天然ガスの産地である「南関東ガス田」が存在し、その産出量は日本最大級である。この地域教材を生かし、中学校第1学年の地層単元で実践を行った。コア知識を活用した授業を行い、単元終了後に読み物教材を活用し発展的な課題について考える授業を研究した。

2 在籍校での授業実践とコア知識

本実践では、三つのコア知識を柱とした授業を実践し、発展的な課題として読み物教材を用いた。生徒の理解度は生徒の記述をテキストマイニングして検証した。

一つ目は、「堆積は水の中」である。生徒は、流水のはたらきと堆積物の粒の大きさによる堆積の順番について演示実験を行い、水の運搬作用の後、堆積することを確認した。



図 立体柱状図モデル

二つ目は、「地層はつながっている」である。地層の広がりを考える立体柱状図モデル（図）を開発し、それを用いて、空白部分の柱状図を自分たちで予想を立てた。そうすることで、コア知識が、生徒の実感を伴った理解となった。

三つ目は、「大地の変動はプレートの動きによって起こる」である。断層や褶曲のモデル実験により、大地に力が加わることによって大地が変化するという理解をした。

三つのコア知識を身につけた生徒は、地球領域特有の時間的・空間的な視点を持つことができた。学習後に読み物教材を読み、千葉県南東部で天然ガスが採掘できる理由を科学的に説明することができるようになった。

3 今後の展望

現在、東京学芸大学連合大学院に進学し、研究を進めている。昨年度、第2学年の気象単元で、関東地方で雪が降るのはなぜかという発展的な課題の読み物教材を作成し、実践を行った。今年度は、第3学年、地球と宇宙の単元の読み物教材を作成している。研究と教育という両方の視点を持ちながら、授業研究に取り組み、生徒や地域のために、理科教育を推進していけるよう努力を続けたい。

学校教育における情動の探究

富津市立富津小学校教諭 いそべ 礒部 みつやす 光泰



本研究の目的は、「情動」(affect)の学校教育での働きについて、ブラジルの教育実践家パウロ・フレイレ、および彼から影響を受けた教育論を手がかりにして、分析することである。「情動」とは、今現在、様々な分野で議論されている概念である。また、OECDが『ラーニング・コンパス2030』で提唱した「エージェンシー」——この概念のルーツの一人がフレイレである——とも関連が深い。

先行研究によると、「情動」は「仲間の頑張りに思わず声が出た」といったような、五感を通じて心が動かされたり、意図せず身体が反応したりする体験を引き起こすものとされている。また、身体が醸し出すエネルギーともされる。尚、その情動の体験が、時間の経過と共に言葉で整理できるようになると、「感動した」や「驚いた」という「感情」(emotion)として経験され、価値判断と密接に関わるようになる。

本研究では、学校教育での情動の働きについて、以下の2点が特に重要であると提示する。1点目は、学校での情動体験が、子供たちの感情を豊かにするという点である。現代のデジタル社会では、我々は自分の見たい事・知りたい事を、簡単に体験・経験できるようになった。言葉を変えれば、これは情報メディアによって、感情経験を限定的にされているとも言える。閲覧履歴やリアル動画など、アルゴリズムによって“オススメされる情報”は、いつの間にか我々の選択肢を減らし、“居心地のよい”世界観を作り上げる。“居心地のよい”情報だけで構成された世界の中では、その他の情報を気づかないうちに遮断し、そ

の結果、感情は限定されたものになっていく。また、再生数を稼ぐためだけに作成された過激なコンテンツは、目にした者の情動を強烈に触発し、極端な感情を持つようにしていく。その現状に対して、現代の学校教育は、これまで以上に、子供たちの感情を豊かにする事が求められる。学校は、様々な人や物事と出会う空間である。その出会いは、子供たちの情動を多様な仕方で触発する。さらに、直視すべき世界の現実——貧困や自然災害、戦争や紛争、その過酷な環境にいる人々の生活史等を、学校教育の中で具体的に取り上げ、目を向ける事は情動的な学びとなる。情動の触発の多様さが、子供たちの感情をより一層豊かなものにしていくのである。

2点目は、子供たちと過ごす“ありふれた日常”の中に、既に情動的な意味があるという点である。時間や費用の最適な効果が求められる現在、学校教育には「どうしても効率化・可視化できない部分」が存在する。私たちは、何気ない会話や、見過ごせない出来事への指導、1回の授業へかける思い等により、子供たちと情動的な関係を築いている。その関係は、悩んだり傷ついたりすることの連続でもある。それでも尚、粘り強く関わろうとする事が、ありふれた日常の情動体験であり、それこそが子供たちの感情を豊かにし、健全な精神発達に欠かせない実践なのである。

本研究で示した事は、即時的効果を期待することが難しいかもしれない。しかし、その難しさに直面しながらも、子供たちと向き合い続ける学校や教師の存在意義、価値、そしてその尊さについて今後も研究していく。

教員の意識を変える 市原市のGIGAスクール環境



市原市立国分寺台西小学校校長（前市原市教育センター指導主事）

いた いさお
生田 勲

1 市原市のICT環境の概要

令和2年11月に、千葉県の市の中では最も早く1人1台タブレット端末を整備するとともに、県内初で市内全普通教室にボード一体型電子黒板を設置した。

全てのタブレット端末には各種授業支援ソフトウェアを導入しており、高速大容量のインターネット環境も同時に整備した。

2 主体的・対話的で深い学びの実現のためのICT活用

(1)市原市GIGAスクールの概要

IchiHaRa 市原市GIGAスクールの概要 市原市教育委員会

●学力を基礎にして、必要な情報を収集・分析し、それを活用して主体的に課題解決する子どもの育成

「GIGAスクール構想」とは

- 1人1台タブレット端末と高速大容量の高速ネットワークを一体的に整備する
- 多様な子どもたちを誰一人取り残さず、公正に教育機会を保障し、個性・能力を積極的に伸ばせる教育環境を整える
- ITの活用により従来の子どもたちの学びを超越する。これまでの教育実践とITのベストミックスにより、個性・能力を伸ばせる教育環境を整える

市原市GIGAスクールを促す仕組み

- 1人1台タブレット端末と高速大容量の高速ネットワーク（児童生徒、教職員）
- 授業での活用実践
 - 電子黒板
 - 授業支援ソフト（動画共有など電子黒板との連携）
 - 電子教材・ソフト
 - デジタル教材（指導者用・生徒用）
 - 電子黒板
- 学習の促進（学習状況に応じて出題される電子ドリル）
- ICT活用による授業の質の向上（共有）
- ICT活用による授業の質の向上（共有）
- ICT活用による授業の質の向上（共有）

市原市GIGAスクールの考え方

従来の学習・授業方法の構築

- 1人1台タブレット端末を基本に
- ICT活用による授業の質の向上
- 主体的・対話的で深い学びの実現のための授業実践

ICT →

(図1)

市原市GIGAスクール構想では、まず二つの目標を設定した。一つは、最終ゴールとなる最上位目標、もう一つは、スムーズな導入かつ活用のための段階的目標である。(図1)

最上位目標は、「学力を基礎にして、必要な情報を収集・分析し、それを活用して主体的に課題解決する子どもの育成」とした。

四つの段階的目標は、

I……InnovativeIntroduction（1人1台タブレット環境に慣れることを目指す）

C……Class-Use（授業の中でのより効果的な活用を進め、効率的で理解が深まる授業を目指す）

H……Home-Use（自宅に持ち帰り、予習や復習などの家庭学習に役立てることを目指す）

R……Re-Innovation（新たな授業の構築、個別最適化を目指す）

とした。

(2)さまざまな学習コンテンツ

①AI電子ドリルの活用

タブレットの持ち帰りの課題を解決するために、市原市では、WiFi環境がなくてもオフラインで利用できるドリル学習環境を整備した。

②ボード一体型電子黒板の活用

GIGAスクールのスピード感を持った実現のために、全普通教室にボード一体型電子黒板を整備した。実際の電子黒板の活用では、ホワイトボード機能のほかに、タブレット連携、TV会議による交流授業、指導者用教科書の提示など様々な場面で活用することができた。

③オンライン会議システムの活用

市原市では、様々なオンライン授業にも挑戦してきた。授業例としては、

- ニュージーランド現地校との交流授業
- 自動車工場とのオンライン社会科見学など、多くの授業実践ができた。

④協働学習支援システムの活用

効果的な授業を行うためには、教員と生徒間を常時接続し、教材配信、画面転送などをシームレスに利用できる環境を導入し、双方向型の授業を実現してきた。

⑤電子黒板を活用した授業コンテンツ作成

電子黒板と指導者用デジタル教科書を活用し、振り返り学習に役立つオンライン授業コンテンツを作成し、いつでも配信できる仕組みを構築してきた。

⑥オンライン動画配信システムの活用

誰でも簡単に動画を配信できる仕組みをGIGAネットワークの中に独自に構築した。これにより、学校は安心して動画を配信できるようになった。

⑦指導者用デジタル教科書の活用

全小中学校に指導者用デジタル教科書のエッジサーバを整備したことにより、どのデバイスからも利用でき、GIGAスクール活用がかなりすすむことになった。

(3)GIGAスクールを支える仕組み

①Intuneとアプリストアの開設

アプリ利用を安全に行うために、市独自のアプリストアとして利用できるIntuneポータルサイトを構築した。様々なアプリを自由に管理・運用できるようになった。

②GIGAスクールアドバイザーとGIGAスクールWEBマガジン



(図2)

GIGAスクールアドバイザーを整備して、市原市全体が一丸となってGIGAスクール推進に安心して取り組めるようにした。そのアドバイスは、「市原市GIGAスクールWEBマガジン」として定期的に市内全教職員、教育委員会関係職員に配付し、150号を数えた。(図2)

3 児童生徒の情報活用能力、活用効果

(1)児童生徒の情報活用能力

市原市では、独自に作成した情報活用能力調査を実施した。

主な成果としては、機器の扱いに慣れ、自由に使いこなしていると考えられる。しかし、課題としては、自分自身を表現するツールとしての使いこなしに難しさを感じている児童生徒が多く見られた。

(2)活用効果

- ①電子黒板の整備によりICTを苦手とする教員も、デジタル教科書を映して、使ってみようという意識が変わってきた。
- ②多くの授業研究において、利活用されている。また、通常の授業や家庭学習など、タブレット端末が日常的に活用されている。
- ③教員も児童生徒も、よい授業を創ろうとする意識が高まってきている。

4 最後に

私は、GIGAスクールの成功の秘訣は、教員が使いやすい環境を整備することで、新しい教育、授業づくりをしていくための意識を変えていき、行動が変容していくことだと思いい、今のこの仕事を精一杯務めている。

誰もが簡単に使えるGIGAスクール環境、市原市ではそれを「最高」という。

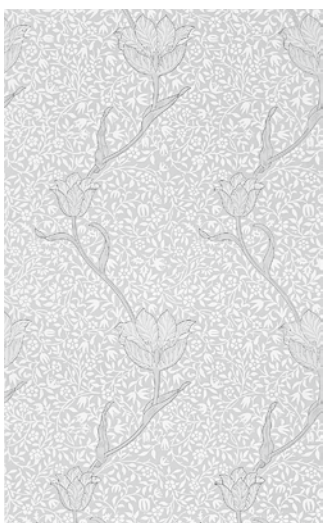
千葉県誕生150周年記念 企画展 「アーツ・アンド・クラフツとデザイナーウィリアム・モリスからフランク・ロイド・ライトまで」 3月24日（日）まで

県立美術館

千葉県誕生から150周年を迎える本年、県立美術館では、今から約150年前の千葉県誕生と同時期に、イギリスのウィリアム・モリスとその仲間たちを発端として世界各地に波及したアーツ・アンド・クラフツ運動の広がり多様性を紹介する。

1 アーツ・アンド・クラフツ運動とは

産業革命の波が押し寄せる19世紀、急速な工業化によって人間が持つ創造性が奪われていくことに反発したイギリスのウィリアム・モリス（1834-1896）とその仲間たちは、中世の手仕事によるものづくりに立ち返り、生活と芸術の統合を目指した活動を始める。モリスらの活動に感化された多くのデザイナーや建築家たちは、「アーツ・アンド・クラフツ運動」と呼ばれる一連の運動を発展させ、やがてその影響はイギリスを超えて世界各地へと広がっていく。



ウィリアム・モリス《ガーデン・チューリップ》1885年、
Photo ©Brain Trust Inc.

特にアメリカでは、ガラス作品の製造で知られるティファニー・スタジオや、アーツ・アンド・クラフツ運動における機械の重要性を唱えた建築家フランク・ロイド・ライト（1867-1959）などを中心に、多様な広がりを見せた。また、千葉県ゆかりの作家である浅井忠をはじめ、当館の所蔵作家にもアーツ・アンド・クラフツ運動が及ぼした影響は大きく、千葉県の文化芸術の発展に寄与している。

2 展示と関連イベント

本展では、アーツ・アンド・クラフツ運動を牽引したイギリスとアメリカの作家たちによるテキスタイル、壁紙、家具、ガラス製品、宝飾品、書籍など約140点の他、同運動の影響を受けた県ゆかりの作家の作品を通して、今日のライフスタイルにも大きな影響を及ぼしている「優れたデザインと質の高いものづくりが生活を豊かにする」という運動の理念を紹介する。

会期中には、展覧会の図録を監修した大阪大学名誉教授の藤田治彦氏による講演会の他、暮らしにまつわる小物を実際に作ってみるワークショップなど、アーツ・アンド・クラフツ運動への理解を深めるさまざまなイベントを開催する。また、展示に関連するグッズを扱う特設ショップもオープンし、展覧会をより楽しんでいただける。

暮らしを彩るデザインの魅力を再発見できる本展覧会に、ぜひお出かけいただきたい。

企画展示

「マリンサイエンスギャラリー アサクサノリ2ーノリの世界ー」

2月23日（金・祝）～5月6日（月・休）

県立中央博物館 分館海の博物館

日本人になじみの深い食材、海苔。原料となる海藻のノリの生きている姿を見たことがあるだろうか。

海の博物館では、平成18年度に企画展示「マリンサイエンスギャラリー アサクサノリーノリの自然誌ー」を開催し、ノリという生きものの姿やその不思議な生活について紹介した。それから17年、ノリの研究は更に進み、新たな知見が蓄積されてきている。

本企画展示では、乾海苔の代名詞「浅草海苔」の原料として江戸時代から養殖されているながら、現在では絶滅危惧種になっているアサクサノリを中心に、ノリという生きものの世界を紹介する。最新の研究成果を含めたノリの面白さと、それを取り巻く環境問題などに関心を持つきっかけとしていただきたい。

1 ノリの基礎知識

ノリは海藻の仲間である。海藻の定義やその中でノリがどのグループに属するのか、どのような生活を送っているのかなど、生きものとしてのノリの基礎的な情報を紹介する。

2 ノリはいろいろ！

ノリは1枚の葉っぱのような単純な体をしているが、世界で150種以上、日本では31種もの種類が発見されている。雑種ができたり、体の特徴は同じなのにDNAでは種類が異なるくらい離れている個体が見つかったりするなど、大変多様性の高い生きものである。2021年に千葉県で見つかった新種センジュアマノリをはじめ、日本のノリ全種類を紹介する。

3 絶滅危惧種アサクサノリは、今

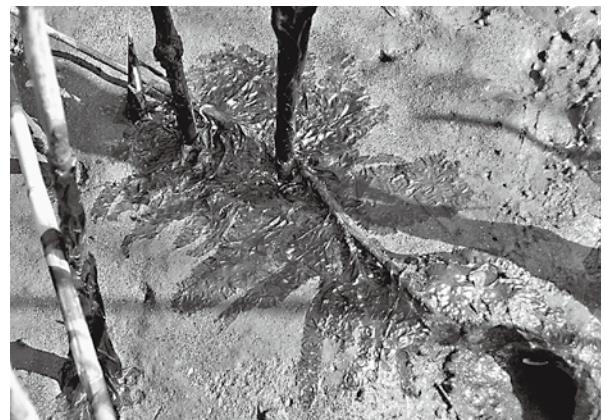
江戸時代から養殖されてきたアサクサノリは、その生育地である河口周辺の干潟の減少とともに、1990年代後半には絶滅危惧種と判断された。

特に東京湾では絶滅したとされていたが、2004年、当館の調査により多摩川河口の干潟で再発見され、マスコミ等にも取り上げられるなど注目を集めた。その後の継続的な調査でわかってきたアサクサノリの生育地の特徴や生育状況の変化、保全活動などについて紹介する。

4 ノリ養殖の今

ノリ養殖は日本各地の内湾で行われる重要な産業で、千葉県の東京湾側でも盛んに行われている。しかし、近年、温暖化に起因するとされる生産量の減少や、魚・鳥による食害など、さまざまな問題にさらされている。

千葉県のノリ養殖を例に、その課題と漁業者やノリ研究者によって進められている対策を紹介する。



東京湾多摩川河口干潟で種子植物のヨシの根元に生える絶滅危惧種アサクサノリ

Challenge! 働き方改革



君津市立八重原小学校校長 おおた 太田 ゆかり

1 はじめに

「働き方改革は、教職員が余裕を持って子供と向かい合う時間を確保し、子供たちの笑顔と成長にやりがいを持って職務に邁進していくことができるためのもの」である。しかし、教員不足や教員志望者の減少は続き、それは現場である学校にそのまま影響を与えている。働き方改革の目的を達成するためには、様々な観点から教職員の環境改善の取組が検討され、行われる必要がある。そのような中、どの学校もこの目的を達成するために、いろいろな取組を行っている。

以下は小さな一歩として、これまで本校で取り組んできた内容である。まだまだ検討、実施できることが多い状況ではあるが、取組の中に参考になるものがあれば幸いである。

2 本校の取組

(1)ICT 機器の活用

①校務支援システムの活用

君津市では、出席簿・通知表・指導要録等の作成において、校務支援システムの活用が、職務の効率化に大きな役割を果たしている。その中で、月の途中や月末に校務支援システム内の「出退勤簿」で、自分の時間外勤務時間を確認することにより、業務改善を考え、客観的に見直す機会となっている。

②会議、打ち合わせの効率化

職員会議資料のペーパーレス化、校務についての共有フォルダ内の連絡シート (Excel) を併用した打ち合わせの簡略化により、会議

や打ち合わせの就業時間外への延長がほぼなくなった。

③Google Forms の活用

欠席・遅刻の連絡、個人面談の日程調整等に活用しており、その他にも活用の場面が増えている。

欠席・遅刻の連絡については、朝の職員室での電話対応が大幅に減り、これまでよりも落ち着いて朝のスタートを切ることができている。また、面談については、集計・調整に関わる作業が軽減され、業務改善に大きくつながった。

(2)行事、教育活動の見直し

ICT 機器の活用や日課時程の見直し等により、時間の縮減を図り放課後の事務業務時間を増やすことができたようになった。それに伴い行事の見直しについても「単純になくす」のではなく「見直すこと」について客観的な観点で検討されることが増えた。

①通知表について

発行回数を減らし、所見の記載について見直しを図った。これにより学期末に行う個人面談の目的と意義を再認識し、改めて内容について確認することができた。

②運動会・入学式・卒業式の内容と取組の見直し

特にこれについては、「ただコロナ禍前に戻すのではなく、現状を見極めた上で、活動を考えて実施する」ことを念頭に、内容や練習時間の検討を行っている。

③家庭訪問、授業参観、PTA親子活動の実施形態の変更

家庭訪問を家庭確認とし、その方法についても修正を加えている。また、これまで職員の企画に負うところが多く、負担となっていた親子活動を、学年ごとに決まった内容としてマニュアル化し、PTAの協力も得ている。

④学年、学級経営案の見直し

目標申告シートの活用により、経営案の様式を改善した。目標申告シートに具体的な内容が記入され、経営案が簡潔にまとまり、確認しやすい様式とした。

⑤日課時程の見直し

昨年度3学期に保護者に周知した上で、(総合所見の記載の変更も含む)今年度から教育課程を見直し、日課表の工夫、改善を行うことができた。下校時刻を早め、先生方の業務時間を確保し、翌日の準備ができることで、子供たちと向き合う時間を増やすことにつながった。放課後の時間だけではなく、余裕をもって授業時数を確保できるため、大きな行事前や年度後半に授業時数を調整することも可能となった。

A日課	
8:05~ 8:20 朝の会	
8:20~ 9:05 1校時	
9:15~10:00 2校時	
10:00~10:15 業間(15分間) ※10:15 予鈴	
10:20~11:05 3校時	
11:15~12:00 4校時	
12:00~12:40 給食(40分間)	
12:40~13:05 昼休み(25分間)	
13:10~13:25 そうじ(15分間)	
13:30~14:15 5校時	
14:15~14:30 帰りの会	
14:30~15:15 6校時	

【木曜日(B日課)】
給食まではA日課と同じ
12:50~13:35 5校時
13:35~13:50 帰りの会
※ゴミ拾い等させる。
13:50~14:35 6校時

変更点としては、「朝の帯取り学習をなくす」「昼休みを5分短縮」「週に1日通常清掃をなくし、ごみ拾い等」とした点である。

(3)市教育委員会との協働

市教育委員会から年度初めに平日5日間の準備日数確保、保護者による朝・夕電話対応の時間制限、管理職・教諭による週案のコメント欄記入の廃止等、具体的な提案が示されている。また、それに伴う保護者や地域への配付文書の作成等、学校の働き方改革に向けて先頭に立ち推進くださっている。校内での取組を進めるにあたっては、このような市教育委員会との協働は支えとなり、心強いものとなっている。

3 これまでの取組を振り返って

コロナ禍を経て、「見直すには今」という共通した捉えのもと、様々な取組を行ってきた。一つ一つの取組の見直しを積み重ねる中で、プラスの方向性で「見直すことができることは何だろう」という視点を持って、考える職員集団が育っている。「こんな方法で取り組んでみては?」「他校ではこんなふうに取り組んでいるそうだ。」など、アンテナを高くし、提案をしてくれる職員が増えてきた。校長が自分自身で具体的な対応を考えることは勿論であるが、ボトムアップ型の取組は、「みんなで取り組もう」という意識を高めることにつながっている。加えて、学校の試みについて、保護者の方々のご理解を得られる恵まれた状況の中で、本校の働き方改革を進めることができることに感謝している。働き方改革もまた、「人ありき」だと考える。

教職員が子供との向き合う時間を確保し、より一層のやりがいを持って仕事に向き合うことができるよう、「今できることは何か。」ということを念頭に置いて、引き続き働き方改革を進めていきたい。

【連載・県立高校の今】 第5回

松戸国際高校（グローバルスクール）、袖ヶ浦高校（先進ITコース） 茂原樟陽高校（農業経営者育成に関するコース）、小見川高校（医療コース）

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

1 はじめに

本年度は「連載・県立高校の今」として「県立高校改革推進プラン・第1次実施プログラム」に基づき、令和6年度より新たな学びが加わる学校の取組を紹介している。

今回は、(1)グローバルスクール、(2)先進ITコース、(3)農業経営者育成に関するコース、(4)医療コースの4つの再編項目について、それぞれの概要と、各校の取組を紹介する。

(1)グローバルスクールについて

社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成するにあたり、語学力とともに、グローバルな視点を持ち、幅広い教養や問題解決力等の国際的素養を身に付けることが求められている。

本県ではこれまで、平成27年度に成田国際高校を「グローバルスクール」に指定し、グローバル人材育成のための研究開発を行い、成果を上げてきた。令和6年度には松戸国際高校を新たに指定する。

(2)先進ITコースについて

情報科は、情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、情報産業を通じ、地域産業をはじめ情報社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成することを目標としている。

今後の見通しとして、我が国の労働人口及び若年層人口は全体としては減少するものの、IT関連市場規模の拡大によるIT人材の需要は、先端IT人材（IoT及びAIを活用したIT

サービス市場に従事する人材）を中心として増加が見込まれている。令和6年度には袖ヶ浦高校の情報コミュニケーション科に先進ITコースを設置する。

(3)農業経営者育成に関するコースについて

本県では高校新卒者を含む新規就農者を年間450人確保することを目標としており、「千葉県農林水産業振興計画」計画期間：令和4年度～7年度）今後も更なる担い手の育成が求められる。

さらに、近年の農業構造の変化に伴い農業経営技術は高度化しており、こうした時代の変化に柔軟に対応し、新たな農業の在り方を切り拓くことができる農業経営者の育成が求められている。令和6年度には茂原樟陽高校の農業に関する学科に農業経営者育成に関するコースとして「アグリマネジメントコース」を設置する。

(4)医療コースについて

本県の医師不足の実態を踏まえ、地元医療機関等との連携による医療体験等を通して地域医療に対する理解と関心を高め、医療従事者になる意欲を醸成し、将来の地域医療を担う人材の育成を図ることを目的に、普通科に医療系コースを設置してきた。令和6年度には小見川高校に医療コースを設置する。

設置校	設置年度	設置コース
東葛飾	平成26年度	医歯薬コース
長狭	平成26年度	医療・福祉コース
成田北	令和2年度	医療コース

これまでの医療系コース設置校一覧

2 松戸国際高等学校の取組

本校は昨年、創立50周年、校名を松戸国際高校と改称してから30周年を迎えた。令和6年度からは「県立高校改革推進プラン・第1次実施プログラム」により、「グローバルスクール」に指定される。

(1)社会力豊かなグローバル人材の育成

世界を舞台に持続的発展に貢献できるグローバルリーダーを育成するため、様々な教育活動を実践している。

- ①海外姉妹校交流プログラムの実施
- ②留学生・海外学校訪問団の受入れ
- ③海外修学旅行の実施
- ④国際理解講演会の実施
- ⑤ユネスコスクールへの登録
- ⑥ESD教育・SDGs教育への取組
- ⑦オールイングリッシュによる授業
- ⑧第2外国語（中国・韓国・仏蘭西）の履修
- ⑨異文化理解を推進する学校設定教科・科目
- ⑩スピーチコンテスト・ディベート大会への積極的な参加

本校は「普通科」「国際教養科」を合わせて「国際高校」なのであり、上記の取組に学科による区別は無い。生徒は学校に居ながらにして、「多様性」「国際性」を肌で感じている。

(2)外国籍・海外帰国生徒への支援

①グローバルクラスルームの設置

本校には外国籍生徒が40名、海外帰国生徒が20名在籍している。今年度から外国籍生徒、海外帰国生徒の支援を強化するために、生徒棟の4階に「グローバルクラスルーム」を設置した。「外国人支援コーディネーター」（教員）を常駐させ、月に2回程度来校する「外国人相談員」（中国語・韓国語・ポルトガル語・日本語）と連携を図りながら、支援に当たっている。放課後は外国籍生徒の日本語指導の場だけでなく、外国籍生徒の居場所と交流の

場として賑わっている。

②充実した日本語指導を目指して

本校では外国籍生徒に対する日本語指導として、「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」以外にも、各自の習熟度に合わせて「取り出し授業」（1年次・約20単位分、2年次・4単位分）を実施している。卒業後に日本の大学進学を希望する生徒も多く、そのためには日本語能力試験のN2に合格するレベルの日本語の習得が必須である。

令和6年度から日本語の能力に応じた指導をより充実させるために県教育委員会に「特別教育課程」（2年次・2単位、3年次・4単位）を申請し、外国籍生徒・海外帰国生徒の日本語指導を支援する体制を整えた。



グローバルスクール紹介ポスター

3 袖ヶ浦高等学校の取組

本校は、昭和51年に開校し今年で48年目を迎える、文武両道に活気あふれた学校である。

平成23年4月に設置された情報コミュニケーション科は、千葉県内に2校しか設置されていない情報の専門学科であり、日本の公立高校では初めて1人1台タブレットを導入した。動画作成やWebデザイン、プレゼンテーションの授業などで活用し、「コミュニ

ケーション能力」や「情報活用能力」を高める教育活動を実践している。

今回の「県立高校改革推進プラン・第1次実施プログラム」では令和6年度入学生からこの情報コミュニケーション科に「先進ITコース」を設置する。1クラス定員40名を対象にコース分けを行うので、コースの定員は20名を想定している。

(1)コースの目標

先進ITコースの目標を以下のように設定した。「数理・データサイエンス・AIリテラシーを有する技術者の育成をキーワードに、先進IT技術者を目指すために必要なプログラミングや統計処理スキルを育むとともに、情報・数学・理科・英語の教科学習を充実させ、IT技術を扱ううえでの基礎的・基本的内容を教科横断的に学習する。」

先進ITコースでは、大学や専門学校、研究所や一般企業などと連携を取り合いながら、先進IT技術者を目指すために必要なプログラミングやデータ分析を学んでいくほか、AIの仕組みや活用方法を科学的に学び、自身が興味のある分野のコンテンツの作成などにも取り組む予定である。

(2)コース設置に向けた取組

コース設置に伴い、「船橋情報ビジネス専門学校」や「茨城県立IT未来高等学校」、「かずさDNA研究所」などの視察を行い、どのような「学び」や「設備」が必要なのか、検討を進めてきた。

また今年度より千葉県教育委員会が提携した特定非営利活動法人「みんなのコード」の永野直氏をお招きし、職員を対象とした先進情報技術研修を行った。研修内で実際に生成AIを使用することで、AIを活用する能力を育む教育の在り方について考えることができた。

今後は外部機関の連携先を決定し、カリキュラムや指導計画を検討していく予定である。



先進情報技術研修の様子

4 茂原樟陽高等学校の取組

本校は、平成18年4月に茂原農業高等学校及び茂原工業高等学校が統合し、平成27年度から千葉県の農業教育拠点校に指定され、令和5年度で18年目を迎えた専門高等学校である。

大学科農業においては、農業科、食品科学科、土木造園科の3学科、大学科工業においては、電子機械科、電気科、環境化学科の3学科を設置しており、専門教科の学びによって地域に根差した教育活動を展開している。

(1)コースの設置

令和4年3月に策定された「県立高校改革推進プラン・第1次プログラム」により、令和6年度から農業に関する学科において、農業経営者育成に関するコースとして「アグリマネジメントコース」をスタートすることとなり、将来の農業及び関連産業の経営を担う農業経営感覚を有した生徒を育成するための学習プログラムを設けた。

(2)コースの特徴

主な特徴として、次の3点を挙げる。

- ①将来の新規就農や、農業関連産業の起業及び経営者を目指す意欲を醸成する。
- ②農業に関係する職種の経営に必要な基礎的な知識や、農業用ドローン等を活用したスマート農業などの先端的な技術を学ぶ。
- ③大学・大学校、行政機関、民間企業、農業関係団体と連携した学習を行うことで、就農に限らず、大学・農業大学校への進学、就職もサポートする。

以上のような特徴を踏まえ、体験的な学習を取り入れ、農業経営のセンスを養うための学習内容とした。また、農業科、食品科学科、土木造園科のどの学科に在籍していても、学科を横断した学びを行うカリキュラムとなっている。

本校は、今後も、ものづくりの心を学び、キャリアを生かした人材育成に引き続き取り組んでいく。



農業用ドローンを活用した学習



販売実習による流通の学び

5 小見川高等学校の取組

～地域医療機関・大学との連携による体験重視の医療コース設置に向けて～

本校は香取市小見川地区にあり、桜の名所である城山に隣接している創立101年目の普通高校である。すでに千葉県介護職員初任者研修修了資格が取得できる福祉コースが平成27年4月1日に普通科に設置されており、卒業生は地域の福祉施設に就職するなど、地域福祉の充実に寄与している。

(1) コースの設置

令和6年度より「県立高校改革推進プラン・第1次プログラム」に基づき医療コースを設置する。これにより、福祉コースと医療コー

スが併設されることになる。昨年度よりコースの設置に向けて準備を始めている。

医療コースは、医療の専門職として資格を取得し、地元香取市及び周辺の地域医療に貢献できる人材育成を最大の目的としている。

(2) コースの内容

本校は、従来、1学年の「総合的な探究の時間」において、福祉について学習を進めてきたが、令和6年度より医療と福祉を理解するためのカリキュラムを実施する予定とした。

医療コース選択が行われる2学年からは、地域医療機関での多数の医療現場実習を通して、自分の望む医療職種を決めていくことになる。卒業後、国家資格を取得するためにふさわしい大学・専門学校に進学できるだけの学力をつけるため、これまでのカリキュラム編成を根本から見直した。

医療コースの学校設定科目として、「医療探究Ⅰ」（2学年）と「医療探究Ⅱ」（3学年）を設ける。

「医療探究Ⅰ」では、病院での現場実習や大学等の講師の講義を中心に展開し、実習や講義を通して豊かな人間性と高い倫理観を育むことを目標とした。

「医療探究Ⅱ」では、医療に関する現代的な課題について、自分で調べ、考察し、発表する授業実践を通して、自分の考えを自分の言葉で発信することができる生徒の育成を目指す。



おみがわ医療センターでの学習会の様子

『安房地域における医療的ケア児受け入れに必要な体制整備の支援、及び関係機関との連携におけるネットワークの充実について』 ～「安房地区医療的ケア児ネットワーク連絡会」を通して～

県立安房特別支援学校教頭 すずき 鈴木 てるこ 照子



1 本校の研究について

本校は、千葉県教育委員会研究指定校の指定を受け、昨年度より本研究に取り組んでいる。令和3年9月に施行された「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」を踏まえた小中高等学校等の医療的ケア児受け入れに必要な体制整備の支援、及び関係機関との連携における地区別ネットワークの充実について実践研究に取り組んだ。

2 特別支援学校のセンター的機能の活用

安房地域は医療的ケア児の受け入れが少ない現状がある。まずは現状を把握するための聞き取り、市町教育委員会（館山市、鴨川市、南房総市、鋸南町）や小中高等学校等にアンケートを実施した。また、A市の事例について話し合い、より良い支援について助言した。そして、「県立学校における医療的ケアガイドライン」や本校の「医療的ケア実施マニュアル」等の情報を提供したり、A市の看護師や教職員が本校の医療的ケアの実際や緊急対応訓練を参観したりした。

3 安房地区医療的ケア児ネットワーク連絡会を通して

安房地域の現状やアンケートの結果から、医療的ケア児受け入れに必要な体制整備と関係機関との連携が喫緊の課題であることが分かった。そのため、安房地域の現状を共有し、関係機関とのネットワークづくりの一步とするために、昨年度から本連絡会を実施し、安房地区の市町教育委員会、行政の障害福祉や子育て支援担当、中核地域生活支援センター、

相談支援専門員等20名以上が参加した。

昨年度は本校の取組の紹介と医療的ケア指導医のコメントをお伝えし、相談支援専門員から「安房地区の医療的ケア児の現状」について、そしてA市市民福祉部の方からは市の取組について情報提供をいただいた。

今年度は、市原市教育委員会教育センターの指導主事から「先進的な地域に学ぶ医療的ケアの取組」についてと、相談支援専門員から「てとて相談室からみた安房地域の医療的ケア体制の現状」について講話をいただいた。そして、参加者での情報交換を行い、全体で課題を共有することができた。

参加者からは、「先進的な市原市の取組を具体的に伺うことができて良かった。」「安房地域の医療的ケアの実情が分かった。まずは知ることが大事。」「教育委員会と福祉等の、他部局との連携や情報共有ができたことが良かった。」「まずは自市での他課との共有の場が不足していることが課題。」「この連絡会をこれからも続けてほしい。」などと、多くの声をいただいた。

本連絡会を通して、安房地区の医療的ケアの現状についての情報共有を図ることができ、関係機関のネットワークがつながるためのスタートを切ることができた。特に各市町の担当者が、自分には何ができるかを考え、庁舎内で他課との横のつながりを始めたいと前向きに捉えていた姿が印象的であった。

今後も、本校は地域のセンター的役割を果たせるよう、子供たちの笑顔のために、関係機関の皆様と顔の見える関係を大切にしながら、使命感をもって取り組んでいきたい。

千葉歴史の散歩道

古代下総の役所群—市川市国府台遺跡—



ここのだい
文化財主事 勝田 雄大
県教育庁教育振興部文化財課

7世紀後半から8世紀初頭にかけての日本列島では、中国を規範として、律令という法体系にもとづく中央集権国家の建設が目指された。それに伴い、地方行政制度の整備も進められ、各地に国—郡—里（郷）が置かれることとなった。現在の千葉県は、およそ当時の下総国・上総国・安房国にあたり、各国には政府の出先機関である国府が置かれた。このうち下総国府の所在地が、現在の市川市（当時の下総国葛飾郡）にあたりと考えられている。

国府台遺跡は市川市国府台に位置する。この地域は「国府台」という地名の示す通り、下総国府の中核施設である国庁や関連する諸施設の所在が想定され、過去の発掘調査でも、古代の役所群が立地していたことを想起させるような遺構・遺物が見つかった。

県教育庁教育振興部文化財課では平成28年度～令和4年度にかけて、県営住宅の建て替え工事に伴い、遺跡南端部地点での発掘調査を実施してきた。その結果、平成28・29年度の調査では古代の道路跡が、令和2～4年度の調査では主軸方位を揃えた掘立柱建物群、建物地下を掘り込み土質の異なる土を交互につき固めて埋め戻す地盤改良（版築工法）を行った建物跡（写真1）、南北に延びる大型の溝状遺構（写真2）などが検出された。このうち掘立柱建物群と大溝は主軸方位が揃い、また、建物群が大溝に東側で区画されている

かのように分布しているため、これらは、一連の施設であったと考えられる。同地点とその周辺は、葛飾郡を統括する葛飾郡家に関連する諸施設の所在が想定されており、今回検出された遺構群についても下総国府もしくは葛飾郡家に関連する施設である可能性がある。

昨今では、市川市教育委員会によっても下総国庁推定地である市川市スポーツセンター野球場とその周辺の調査が進められている。国府台遺跡の今後の調査成果に注目である。



写真1 版築遺構



写真2 大型溝状遺構

千葉教育 葉 (No. 684) 令和6年2月1日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター（代表）鉄井 修一
〒261-0014 千葉県美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204
URL <https://www.ice.or.jp/nc/>
印刷所 千葉県療育センター いずみの家
〒261-0003 千葉県美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465

次号予告

『千葉教育』桜 (No.685)

◆特集 チーム学校の充実

○シリーズ 現代の教育事情

国士舘大学体育学部 教授
館山市立房南中学校 校長

喜名 朝博
川名 厚

○提言

千葉県中央児童相談所 所長

渡邊 直

令和5年度 シリーズ 現代の教育事情

蓮 680号	千葉の教育150年
萩 681号	生徒指導の充実
菊 682号	特別支援教育の推進
梅 683号	キャリア教育の推進
菜 684号	児童生徒の学習意欲の向上
桜 685号	チーム学校の充実

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育
菜号 読者アンケート



表紙写真について
成田市立西中学校

クリエイティブ・ラボでの学習風景
クリエイティブ・ラボは生徒が自由に発想し、
創造的な学びを展開できる学習スペースです。